捕虜盗聴記録に見る第二次世界大戦時におけるドイツ国防軍将校の敵国認識

文学研究科

哲学歴史学専攻　西洋史学専修

2024 年度

BBA23022

小林（こばやし）　巧（たく）

目次

はじめに.....1

第１章：ドイツ国防軍の戦況と国防軍将校団の概観.....7

第１節：ドイツ国防軍を取り巻く戦況.....7

第２節：　国防軍将校団の構成.....12

第３節：　国防軍将校の世界観.....15

第２章　トレント・パークの捕虜と盗聴記録.....20

第１節：連合国による捕虜諜報活動.....20

第２節：トレント・パークにおける盗聴活動と盗聴記録.....25

第３節：トレント・パークの国防軍将校捕虜.....29

第１節：対ロシア認識.....35

第２節：ノルマンディー以前から存在する対イギリス認識.....39

第３節：ノルマンディー以後に現れる対イギリス認識.....43

おわりに.....49

図表１　第二次世界大戦年表.....52

図表２　ドイツにおける空襲による死者数.....54

図表３　1933 年～1945 年における将官の階級分布と累計.....54

図表４　分析対象の略歴.....55

参考文献.....56

はじめに

第二次世界大戦において、絶望的な戦況においてもなお、ドイツ国防軍が戦闘を続けたのはなぜか―この問いは、現在も明確な回答が得られていない。そのことは、「43 年以降 45 年までの間にさまざまな崩壊現象がありながら、また最終局面で連合国が国土の 5 分の 4 までも占領した後でさえも、なお第三帝国の体制は闘いつづけたのはなぜか」[1]、「国防軍兵士たちはなぜ 1918 年のように反乱や 暴動、あるいは集団脱走・投降をすることなく最後まで戦い続け、あるいは少なくとも持ちこたえたのか」[2]という指摘においても明確である。しかしながら、第二次世界大戦末期に関しての研究は 21 世紀になってようやく本格化[3]しており、大戦末期の国防軍に関する研究も十分とは言えない。このことを踏まえて、本稿ではドイツ国防軍将校の心性を明らかにすることを目的とする[4]。

第二次世界大戦時におけるドイツ国防軍を扱った研究は多岐にわたっている。第二次世界大戦後しばらくは軍事史や戦争犯罪研究において分析対象となっていたが、1990 年頃から日常史や文化史に刺激され、ドイツ国防軍においてどのような世界観が優勢であったか、それらが国防軍将兵の個人的・集団的行動にどの程度影響を与え、彼らの行動にどのような制約を生み出したかに注目が集まりだした[5]。そして国防軍将兵の個人的・集団的な認識、解釈を分析するために、野戦郵便や日記などの主観で作成されたエゴ・ドキュメントが主な史料として用いられるようになった。その理由として、従来の国防軍研究で利用されていた、戦時日誌や人事記録

---

[1] 永岑三千輝「ホロコーストの論理と力学―総力戦敗退過程の弁証法」『横浜市立大学 論叢 社会科学系列』第 55 号、2003 年、265-296 頁、286 頁。

[2] 小野寺拓也「危機的状況に現れる「真の顔」―第二次大戦末期のドイツ社会・国防軍 をめぐる近年の研究から」『ヨーロッパ研究』第 8 巻、2009 年、173-184 頁、173 頁。

[3] 小野寺「危機的状況に現れる「真の顔」、173 頁。

[4]「国防軍」という語は陸・海・空の三軍の総称である。

[5] Tobias Seidl, *Führerpersönlichkeiten. Deutungen und Interpretationen deutscher Wehrmachtgeneräle in britischer Kriegsgefangenschaft,* Paderborn, 2012, S. 13-14.

のような史料は、ドイツ国防軍将兵の認識や解釈を分析するのには適していなかったということが挙げられる。また、エゴ・ドキュメントではあるものの、戦後に出版された回想録や報告書も適していなかった。戦争を経験してから時間的に離れていることが欠点であるためだ[6]。

だが野戦郵便や日記にも問題があった。野戦郵便は、ドイツ国防軍の公式検閲と自身の頭の中での検閲という二重の検閲を受けており、国防軍将兵の認識と解釈を構築することに対する野戦郵便の史料価値は限られている[7]。ドイツ国防軍将兵の日記は、野戦郵便よりも将兵の感情をありのままに記録していることが多いが、ほとんどの将兵は日記を書いておらず、基本的に一部の高級将校しか残していないため例外的なものとなっている。このように、これまで用いられてきた史料では、国防軍兵士の心性を明らかにすることは困難であり、「これまで研究で扱われていた史料の史料的価値は、常に制限されていた」[8]といえる。

こうした研究状況を打破するために、2010 年代以降は、これまでの史料よりも将兵の認識や感情をありのままに記録した史料として、盗聴記録（Abhörprotokolle）が利用され始めている。詳細は第 2 章で後述するが、簡潔に説明すると、盗聴記録とは、連合国の捕虜になり、収容所に収容されていた国防軍将兵が収容所内で交わした会話を盗聴し、記録したものである。大別するとイギリス軍によって作成されたものと、アメリカ陸海軍によって作成されたものに分けることができる[9]。

イギリス側の盗聴記録は、1996 年に機密解除され公開されたものをゼンケ・ナイツェル

---

[6] Seidl, Führerpersönlichkeiten, S. 20-21.

[7] Seidl, Führerpersönlichkeiten, S. 21；小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」—第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社、2012 年、24-25 頁。

[8] Alexander Hoerkens, *Unter Nazis? Die NS-Ideologie in den abgehörten Gesprächen deutscher Kriegsgefangener in England 1939-1945*, Berlin, 2014, S. 9.

[9] イギリス側の記録については Sönke Neitzel, *Abgehört. Deutsche Generäle in britischer Kriegsgefangenschaft 1942-1945*, Berlin, 2007 参照。アメリカ軍の記録については Felix Römer, *Kameraden. Die Wehrmacht von innen*, München/ Zürich, 2012 参照。

（Sönke Neitzel）が一部を抜粋し、史料集『盗聴されていた（*Abgehört*）』として刊行したことで国防軍研究に登場することになる[10]。イギリス側の記録を最初に用いた研究者もナイツェルであり、彼は心理学者のハラルト・ヴェルツァー（Harald Welzer）と共に盗聴記録を分析し、ナチ体制や軍隊における規範・価値観や、戦争・暴力といったその時代や出来事に特有の文脈を重視した[11]。彼らの研究を皮切りに、イギリス側の記録は様々な角度で分析されることになる。アレクサンダー・ヘルケンス（Alexander Hoerkens）は、兵士たちのイデオロギー化という観点から分析し、政治的、「人種的」もしくはイデオロギー的な問題に触れている会話は、全体の 5 分の 1 に満たないと主張している[12]。トビアス・ザイトル（Tobias Seidl）は、1943 年 5 月から 1944 年 5 月の間に捕虜になった者の盗聴記録を分析している。彼は国防軍将校に焦点を当て、主に彼らの敵国認識やドイツ軍人としての自己認識、ナチズムや戦争に対する考えを明らかにした[13]。ゼバスティアン・グロース（Sebastian Groß）は、社会科学の方法論を使って、陸軍兵士、海軍兵士、空軍兵士、将官をそれぞれ個別に分析している。グロースは、出自や社会化といった要因は同じ心性の形成にはほとんど寄与せず、むしろ共通の戦争体験が兵士たちの共通認識を構成し、兵士としての役割にのめりこんでいったことが兵士としての価値観を内面化させたと結論づけた[14]。

イギリス側の記録を分析した研究に共通して指摘できるのが、社会学や心理学的手法を用いて資料を分析した点、ナチ・イデオロギー的な要素は兵士にとって重要ではなく、軍事的価値

---

[10]Neitzel, *Abgehört*, S. 8-9.；ゼンケ・ナイツェル、ハラルト・ヴェルツァー（小野寺拓也訳）『兵士というもの　ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理』みすず書房、2018 年、1-2 頁。小野寺拓也「ナチズム研究の現在 1　史料としての捕虜盗聴記録の可能性:『兵士というもの』をめぐって」『みすず』、第 60 号(5)、2018 年、2~13 頁を参照。

[11]ナイツェル、ヴェルツァー『兵士というもの』。

[12] Hoerkens, *Unter Nazis?.*

[13] Seidl, Führerpersönlichkeiten.

[14] Sebastian Groß, *Gefangen im Krieg. Frontsoldaten der Wehrmacht und ihre Weltsicht*, Berlin, 2012.

観や戦争そのものが兵士に影響を与えているという結論に至っている点だ。ナイツェルやグロースらは、ナチ体制、ナチ・ドイツの支配下にあった国防軍に所属していたことが国防軍兵士の行動や考え方に影響を与えたのではなく、あくまで彼らは軍人だから戦ったに過ぎないと主張する。「彼らが戦争で戦うのは何か確信があったからではなく、自分が兵士だからであり、戦うことが彼らにとっての仕事だからである」というナイツェルの指摘は、このことを端的に表している[15]。一方で、彼らの結論に対しては、イタリア兵とドイツ兵の考え方がまったく異なっていたように、他の軍隊との違いを説明できていないこと[16]や、　イデオロギーを軽視していることに対する批判もある[17]。

ナイツェルらの研究とは反対に、アメリカ側の記録を分析した研究者であるフェリックス・レーマー（Felix Römer）はイデオロギー的信念が果たす役割を重視している[18]。彼は、アメリカで収容されていた兵士たちがイデオロギーや政治について滅多に語らなかったのは、総統、体制、国家に対する忠誠と献身があまりにも自明であったためであり、語ることは余計なことだったためだと主張している。ナイツェルを批判した研究者も、「レーマーは人類学的な普遍性ではなく、ある時代と場所に特有の心性が、人間の戦い方を決定するという命題を、相互に補強しあう印象的な証拠の重みをもって、説得力を持って再証明した」と評価している[19]。アメリカ側の記録を用いた研究者としては、他にシュテファニー・フックス（Stephanie Fucks）[20]や

---

[15] ナイツェル、ヴェルツァー『兵士というもの』、8 頁。

[16] Byron Schirbock: Rezension von: Sebastian Groß, Gefangen im Krieg. Frontsoldaten der Wehrmacht und ihre Weltsicht, Berlin, 2012, in: perspectivia.net, 19./20. Jahrhundert – Histoire contemporaine, 2015.

[17] MacGregor Knox: Rezension von: Sönke Neitzel/ Harald Welzer: Soldaten. Protokolle vom Kämpfen, Töten und Sterben, Frankfurt am Main, 2011, in: *sehepunkte* 12, 2012, Nr. 3.

[18] Felix Römer, *Kameraden*, 2012.

[19] MacGregor Knox: Rezension von: Felix Römer, Kameraden. Die Wehrmacht von innen, München/ Zürich, 2012, in: sehepunkte 14, 2014, Nr. 1.

[20] Stephanie Fuchs, *»Ich bin kein Nazi, aber Deutscher«*, unv. Masterarbeit, Universität Bern,

ミヒャエラ・クリスト（Michaela Christ）[21]などが挙げられる。フックスは兵士たちが抱いていたナチ体制や敵国に関するイメージ、ナチスのプロパガンダに対する反応を明らかにした。また彼は、フォート・ハント[22]で度々行われた尋問によって、同部屋の戦友が、祖国や戦友への裏切りとなることを言っているのではないかという疑念が兵士たちの間に生まれていたことを指摘しており、この観点はイギリスよりも詳細に尋問を行っていたアメリカ側の盗聴記録特有のものといえる。クリストは、暴力行為や戦争犯罪についての会話に焦点を絞り分析し、兵士たちが何を暴力と定義し、どう評価するかは時間の経過とともに変化したと主張している。彼女は、戦争末期になればなるほど、報復というテーマが会話に頻繁に現れ、ドイツの戦争犯罪による犠牲者への共感が高まったということを明らかにした。

このように、盗聴記録を史料として利用した研究は多岐にわたっているが、全体として反ユダヤ主義に限定された狭義のナチ・イデオロギーや軍事的価値観といった「ハード」な面に注目するあまり、兵士の感情や噂、被害者意識などといった「ソフト」な心性に着目し、盗聴記録を本格的に分析した研究が欠けている[23]。小野寺が指摘しているように、国防軍兵士を取り巻く「世界観のフィールド」とは反ユダヤ主義のような「ナチ世界観の中心核的要素」だけではなく、戦友意識や男らしさ、被害者意識などといったものの総体であり[24]、その実態を明らかにするためには「ハード」「ソフト」両面から分析する必要がある。このことを踏まえて、本研

2010.

[21] Michaela Christ, »Das wird sich alles einmal rächeln.« Gewalt und Verbrechen in den Gesprächen deutscher Kriegsgefangener im amerikanischen Verhörlager Fort Hunt, in: Harald Weltzer, Sönke Neitzel, Christian Gudehus(hrsg.), *Der Führer war wieder viel zu human, viel zu gefühlvoll*, Frankfurt am Main, 2011, S. 266-298.

[22] アメリカ東海岸に設置された、枢軸国兵士を収容するための収容所である。詳しくは第 2 章 1 節で説明している。

[23] ナイツェルが噂や感情に、レーマーが感情について触れてはいるが、この観点を主眼においてはいない。

[24] 小野寺『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』、10 頁。

究では、様々な要素からなる心性のうち、特に敵国認識に焦点を当てて、「ソフト」「ハード」のうち、どのような出来事が将校の敵国認識に影響を与えたかを考察する。

本論に入る前に、本稿が用いる史料と、国防軍将校の定義について説明する。史料としては、ナイツェルが刊行した史料集『盗聴されていた（*Abgehört*）』を用いる。この史料集は、イギリスの盗聴記録のうち、特に階級の高い者の会話のみを抜粋したものとなっている。また、収録されている盗聴記録は大半が 1944 年 6 月以降、つまりノルマンディー上陸作戦以降に捕虜になった者の会話であり、この点で同様にイギリスの盗聴記録を用いて国防軍将校について分析しているザイトルとは異なる[25]。詳しくは「おわりに」で述べるが、この捕虜の時間的相違が、ザイトルの研究と本稿の分析結果との間に違いを生んだ一因と考えられる。また、本稿において国防軍将校とは、少佐から上級大将までを含む幅広い概念として定義する[26]。

最後に、本論文の章構成について説明する。まず初めに第 1 章でドイツ国防軍を取り巻く戦況、国防軍将校の総数や将校団の構成、国防軍将校が抱いていた世界観を概観する。次に第 2 章では本稿で扱う史料の盗聴記録がどういった経緯で作成されたものなのか、その意図や史料としての性質、分析対象となる将校の略歴と人物像を説明する。そして第 3 章では実際に盗聴記録を分析し、彼らの敵国認識を明らかにしたうえで、その認識が何が原因で生み出され補強されたのかを解明する。最後に「おわりに」では、本稿の成果と今後の課題について述べる。

---

[25] 先述のように、ザイトルは 1943 年 5 月から 1944 年 5 月の間に捕虜になった者の盗聴記録を用いており、分析している盗聴記録も、大半がこの期間に記録されたものとなっている。

[26] 少将から上級大将までのみについて言及する際には、「将官」という語で表記する。

第 1 章：ドイツ国防軍の戦況と国防軍将校団の概観

第 1 章ではドイツ国防軍が体験した戦場や、ドイツ国防軍および国防軍将校団の構成、国防軍に所属していた将校らがどのような世界観を抱いていたのかということを説明し、第 3 章における分析と照らし合わせるための前提とする。第 1 節に関しては、第二次世界大戦の経過を詳細に説明することは本稿の内容から離れるため、大まかな戦争の推移を描写しつつ、第 2 章、第 3 章に関係する内容に触れる。

第 1 節：ドイツ国防軍を取り巻く戦況

1939 年 9 月 1 日に、ドイツがポーランドに侵略したことによって勃発した第二次世界大戦だが、本稿ではドイツ国防軍が関与した戦いに焦点を絞り、ヨーロッパにおける戦争の経過を大きく 6 段階に分けて説明する。1 段階目が 1939 年のポーランド侵攻、2 段階目が 1940 年のオランダやフランスとの戦い（西部戦線）からイギリスに対する爆撃まで、3 段階目が 1941 年のバルカン半島侵攻及び北アフリカにおける戦い（アフリカ戦線）、4 段階目が 1941 年 6 月から始まる独ソ戦、5 段階目が 1943 年のアフリカ軍団の降伏、そして 6 段階目が連合国によるノルマンディー上陸作戦の実施からドイツ降伏までである[27]。

1 段階目のポーランド侵攻では、国防軍はポーランドの都市に対して苛烈な爆撃を加え、装甲部隊が航空支援を受ける形でポーランド軍の防衛線を突破した。潜在的なレジスタンス組織者を排除するために、ポーランドの聖職者およびエリート全般の殺害命令が出ていたこともあり、大量の民間人とユダヤ人が殺された。このことに対しては、国防軍の一部から強い反対があった[28]。だが占領下のポーランドにおいて経済的に発展の遅れた東欧を初めて目の当たりにしたドイツ兵は、ナチの人種主義的世界観を裏付けた。数百万の「劣等人種」を征服したこと

---

[27] 図表 1 の年表を参照。

[28] ゲアハード・L・ワインバーグ（矢吹啓訳）『第二次世界大戦』創元社、2018 年、35-39 頁。

は、道徳や倫理における制約を消滅させるきっかけになった[29]。

2 段階目の西部戦線では、まずドイツが大西洋を掌握するため 1940 年 4 月にデンマークやノルウェーに侵攻したのち、5 月からオランダやベルギー、フランスといった西部に攻撃を仕掛けた。国防軍は破竹の勢いで進軍し、6 月にはパリを占領した。そしてこのころ、国防軍の陸軍部隊は、降伏したアフリカ植民地出身のフランス軍兵士を虐殺するという出来事が発生し、国防軍による戦時暴力は一層勢いを増した[30]。フランスに対する勝利は、第一次世界大戦の「大敵」をほとんど人的・物的被害なく破ったことによって、国防軍に自信をつけさせ、第一次世界大戦のトラウマを克服させ、ナチ政権と総統に対する支持を増加させた[31]。

だが国防軍の攻勢はイギリスによって食い止められた。フランス降伏後も抵抗をつづけたイギリスを屈服させるため、8 月 10 日「ブリテンの戦い」と呼ばれる大規模な航空機戦が勃発した。すでに 5 月のオランダ侵攻時点で、ドイツ空軍による大規模な都市爆撃が行われ、それに対する報復としてイギリス軍によるドイツのルール地方への爆撃が行われていたが、この戦いによって空襲という手段が本格的に戦争に組み込まれることになった。当初、空爆は軍需工場や空軍施設など、戦争に関連する施設に限定されていたが、ドイツの爆撃隊が誤ってロンドン上空で未使用の爆弾を捨て、そのことをイギリス側が首都爆撃の開始と認識したことによって、無差別爆撃による報復合戦が始まった。イギリス諸都市に対する空爆は、ドイツに対する市民の敵愾心をかきたて、報復感情を促した。そのため軍事施設だけを狙う軍事目標主義は事実上放棄され、無差別爆撃、特に産業施設と住民の戦意喪失を狙ったテロ爆撃が空爆の主流になった[32]。そしてこの流れが、ドイツに対する大規模空爆に繋がっていく。

3 段階目の北アフリカにおける戦い（アフリカ戦線）及びバルカン半島侵攻は、どちらの戦

---

[29] リチャード・ベッセル(大山昌訳)『ナチスの戦争 1918―1949』中公新書、2015 年、124-126 頁。

[30] ワインバーグ『第二次世界大戦』、53-58 頁。

[31] ベッセル『ナチスの戦争』、140-141 頁。

[32] 荒井信一『空爆の歴史―終わらない大量虐殺―』岩波新書、2008 年、82-86 頁。

いもイタリア軍が先に侵攻していた地域で勃発したものであり、戦況が悪くなったイタリア軍を助けるために、ドイツ国防軍が戦いに介入したことによって発生したものである。イタリアが敗北することでムッソリーニ政権が転覆するかもしれないと恐れたヒトラーは、1941 年 2 月、北アフリカのリビアに国防軍を派遣した。そして同年 4 月に、国防軍はユーゴスラヴィア、ギリシャへ侵攻を開始した[33]。北アフリカにおける国防軍組織はアフリカ軍団と呼ばれ、主にイギリス軍と対峙することになった。東欧への軍事介入は、きたるソ連との戦争遂行の障害になる可能性を考慮された結果でもあった。そしてユーゴスラヴィアは 1941 年 4 月 17 日に降伏した。ギリシャも 4 月の終わりには全域が占領された。ドイツ占領下のバルカン半島では、レジスタンスの蜂起を妨げるため、容赦のない弾圧が行われ、反ユダヤ的措置もとられた[34]。

4 段階目の独ソ戦は、ジェノサイドや収奪、捕虜や民間人の虐殺がいたるところで行われ、「世界観戦争」や「絶滅戦争」と呼ばれるほど惨禍をもたらした戦争だった。反ユダヤ主義と反共産主義が融合した、「ユダヤ・ボリシェヴィズム」という敵に対する闘争が喧伝され、「アインザッツ・グルッペ」と呼ばれる武装親衛隊や警察隊員から組織される特殊機動隊が、ユダヤ人の殺害を実行した。民間人だけでなく、ソ連軍の各部隊に配置されていた、コミッサールという政治委員の殺害もヒトラーによって命令された[35]。

1941 年 6 月 22 日に作戦が始まり、当初はソ連軍に壊滅的な打撃を与え、同年 10 月には首都モスクワの近郊にまで進出した国防軍だったが、12 月に行われたソ連軍によるモスクワ前面での反攻によって戦線が停滞することになった。1942 年 4 月から 7 月にかけて、国防軍は戦

---

[33] ワインバーグ『第二次世界大戦』、66-69 頁。

[34]ベッセル『ナチスの戦争』、144-147 頁。若林美佐知は、ユーゴスラヴィアで行われた占領措置は、ロシア人やポーランド人に対してと同様の過激な反スラヴ主義によって行われたものではなかったと主張している。若林美佐知「ナチ体制の政策決定要因をめぐる一考察—ドイツ占領下セルビアにおける抵抗運動対策をてがかりに—」『現代史研究』第 51 号、2005 年、1~14 頁。

[35] 大木毅『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍』岩波書店、2019 年に全体的に依拠。ベッセル『ナチスの戦争』、147-162 頁も参照。

力を二分し、政治的打撃を与えるためにスターリングラードを、石油を確保することを目的として南方のコーカサス地域を攻撃する二正面作戦を展開した。だがスターリングラードにおけるソ連側の抵抗が激しく、1942 年 12 月になっても占領することはできなかった。そして 1943 年初頭には、スターリングラード攻略を命じられていた部隊である第 6 軍がソ連軍側の反抗によって包囲され、ソ連側に降伏、大量の国防軍兵が捕虜になった。これ以降、一時的に戦線が停滞することはあるものの、国防軍は確実に追い詰められていく。最終的には、1944 年 2 月 22 日のソ連軍大規模攻勢によって、東部戦線の崩壊が決定づけられた[36]。

5 段階目がアフリカ軍団の降伏である。1941 年に北アフリカに送られた国防軍は、当初は順調だったが、1942 年 7 月にエジプトでドイツ・イタリア連合の進撃がイギリス軍によって抑えられ、同年 10 月にはアメリカの支援を受けたイギリス軍の攻勢が始まった。国防軍は徐々に押し戻され、11 月に西アフリカに連合軍が上陸すると、連合軍に挟まれる形で戦線が形成された。ドイツ軍はチュニジアに追いやられ、1943 年 5 月に 27 万人以上の枢軸国兵が降伏し、大量の国防軍兵が捕虜になった[37]。そして北アフリカを橋頭堡として、7 月にはシチリア島およびイタリア本土に連合軍が上陸し、9 月にイタリアが降伏することになる

北アフリカでアフリカ軍団が降伏し、連合軍がシチリア島に上陸している間に、英米両空軍も連携した作戦を計画していた。それがハンブルクを目標とする「ゴモラ作戦」(1943 年 7 月 24 日～8 月 3 日)である。すでに 1942 年春には、アメリカ陸軍航空隊(USAAF)第八航空軍がイギリスに到着していた。だが英米の合同爆撃作戦を実施するには、英米の爆撃手法の違いを解決する必要があった。アメリカ軍が目標を軍事施設に限定した選択爆撃を基本方針としていたのに対して、イギリスは夜間爆撃による都市焼夷攻撃に転換していたからだ。最終的に、アメリカ軍は昼選択爆撃にこだわったため、イギリス空軍が夜間の地域爆撃を行い、アメリカ空軍が昼間選択爆撃を実施した。その結果、アメリカ空軍による爆撃はたった 1 割の破壊に留ま

---

[36] 大木毅『独ソ戦』。

[37] ワインバーグ『第二次世界大戦』、53-58 頁。114-120 頁。

ったのに対し、イギリスの爆撃は、火災による大量の死者が出ることになった[38]。そして 1943 年 11 月、昼間の精密爆撃において多くの損害が出たことを受け、アメリカ軍も、目視が困難な場合には、特定した目標が存在する地域全体を爆撃する無視界爆撃に転換した。1944 年 10 月までには、ドイツに対する空爆の 80%が無視界爆撃に転換した[39]。

6 段階目の連合国によるノルマンディー上陸作戦は、ヨーロッパの外部勢力であるアメリカ軍主導で行われたものであり、1944 年 6 月 6 日にノルマンディーに上陸した連合軍は、6 月 29 日にフランスのシェルブールを占領し、7 月最終週までにフランス内陸部まで急速に進軍した[40]。戦況の悪化により国防軍がフランスから撤退する際に、「ファレーズのポケット地帯」と呼ばれるファレーズで生じた包囲網によって、残存部隊の大部分が封じ込められ[41]、連合軍の捕虜になった。1944 年 12 月から 45 年の 1 月にかけてアルデンヌで生じた国防軍の大規模反攻作戦が頓挫すると、それ以降は東西両前線から連合軍が迫り、1945 年 5 月にドイツが降伏するまで次々と戦線は崩壊していった。

連合軍がフランスに上陸し、アメリカ軍が本格的にヨーロッパ戦線に介入するにつれて、ドイツに対する空爆も勢いを増すようになる。ノルマンディー上陸作戦以前からハンブルクを爆撃目標とした「ゴモラ作戦」などは実施されていたが、1944 年 6 月 6 日のノルマンディー上陸

---

38 荒井『空爆の歴史』、91-94 頁。死者数は約 42000 人で、この数字はドイツに対する空爆の被害でも最大規模である。図表 2 を参照。

39 荒井『空爆の歴史』、95-99 頁。

40 H・P・ウィルモット（等松春夫監訳）『大いなる聖戦』下巻、国書刊行会、2018 年、194-209 頁。この間に、1944 年 7 月 20 日に国防軍将校クラウス・フォン・シュタウフェンベルクを首謀者とするヒトラー暗殺未遂事件が生じた。暗殺計画に加わった者はほとんどが逮捕され、自決や処刑などによって死に至った。大木毅『戦車将軍グデーリアン―「電撃戦」を演出した男』角川新書、2020 年、285 頁を参照。

41 B・H・リデル・ハート（上村達雄訳）『第二次世界大戦』下巻、中央公論新社、1999 年、224-231 頁。

以降は、それまでと比較にならないほど爆撃は拡大していった[42]。アメリカ空軍は軍事的、工業的価値のないドイツの都市に、大量の高性能爆弾と焼夷弾を投下した。1945 年 2 月 13 日のドレスデン爆撃などはその最たる例であった[43]。

第 2 節： 国防軍将校団の構成

第 2 節では、ドイツ国防軍将校団がどのような集団だったのかを概観する。本節で主に取り扱うのは将校団だが、全体像を把握するために国防軍全体の構成や人員数も提示する。

第二次世界大戦中、累計約 1700 万人が国防軍ないし武装親衛隊に所属したことがあった[44]。第二次世界大戦の開戦時には国防軍は 420 万人もの兵士を抱えており、そのうち陸軍が 370 万人を占めていた。1940 年時点で、陸軍兵士は 450 万人ほど存在しており、最も戦力が増強された年である 1943 年には陸軍だけで 650 万人もの兵士がいた[45]。

1933 年から 1945 年にかけて、国防軍将官は 3000 名以上存在しており、その内訳は陸軍に約 2300 名、海軍に約 290 名、空軍に約 550 名といったものだった[46]。ヴェルサイユ条約によって軍備が縮小されたため、陸軍の将官は 1932 年以前には僅かに約 40 名しかいなかったが、開戦直前の 1938 年には 261 名になっている[47]。戦争がはじまると、将官の数は飛躍的に増加する。例えば、開戦前後の少将の数を例に挙げると、陸軍において 1938 年 10 月 1 日から 1939

---

[42] 1944 年の 10-12 月の三か月間で、1943 年の丸一年分を超える爆弾が投下された。リデル・ハート『第二次世界大戦』下巻、311 頁。

[43] 荒井『空爆の歴史』、91-104 頁。

[44] Reinhard Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite. Rang- und Herkunftsstruktur der deutschen Generale und Admirale 1933-1945*, Oldenbourg, 1996, S. 24.

[45] Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite*, S. 22-23.

[46] Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite*, S. 15, 46. 詳細は図表 3 を参照。

[47] Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite*, S. 20.

年 8 月 31 日の間、つまり開戦前日までに少将であった者および少将に昇進した者はわずか 61 名であった。だが大部隊の急増、将官を含む死傷者の増加、戦争が長期化する近代戦の大きな心理的負担、指導者層の高齢化などを解決するために、将官への昇進が急増し、最終的には陸軍少将だけで 1000 名を超えた[48]。加えて、1942 年末にヒトラーによる命令が下されて、将校団に業績による昇進制度が導入された結果、軍事的・技術的事情と政治的・世界観的理由とが混合されることになった。さらに戦況が悪化にするにつれ、ヒトラーが指導層に処分を下すことも増加した。このような事情から、国防軍における昇進速度は飛躍的に増し、その流動性は高まった[49]。

ナポレオン戦争期の軍政改革以降、将校の昇進は教育・知力と、戦闘能力や軍事的功績などの業績という 2 本柱に基づいて行われていた。将校団は第一次世界大戦やヴェルサイユ条約締結後の軍備制限によってもその根本的性質を変えることはなかった。だが 1932 年から 1939 年にかけて陸軍将校団がほぼ 28 倍に膨れ上がったことで、その社会的・職業的同質性が崩壊した。そして将校団にとって最も重要な転機となったのが、1942 年末の昇進制度の変更だった。この変更は、スターリングラードや北アフリカでの敗北といった 1942 年の甚大な損害が原因となっており、これまでの教育的・社会的な資格に基づく昇進ではなく、戦場での業績のみに基づかせることを余儀なくさせた[50]。

国防軍将校団の構成について研究しているベルンハルト・クレーナー (Bernhard R Kroener) によると、国防軍将校は 4 世代に分けることができる。(1) 1889 年までに生まれて第一次世界大戦時に参謀だった者、(2) 1889 年から 1899 年生まれで第一次世界大戦時に前線将校だった者、(3) 1900 年から 1913 年生まれで第一次世界大戦時に国防軍に勤務していなかった者、(4)

---

[48] Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite*, S. 22, S. 46.

[49] Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite*, S. 24-26. 本稿の分析対象となる将校も、1939 年 9 月時点ではアルニムを除いて全員が大佐ないしそれ以下の階級であった。

[50] Macgregor Knox, 1 October 1942. Adolf Hitler, Wehrmacht officer policy, and social revolution, *The historical Journal*, Cambridge University Press, 2000, p. 801-805.

1914 年から 1926 年ないし 1927 年生まれの兵士で第二次世界大戦中に将校に昇進した最年少世代という区分である[51]。本稿で分析の対象となる国防軍将校はほとんどが（1）か（2）に分類されるため、クレーナーの分類のうち、本稿に関連している（1）と（2）について説明する。

(1)に分類される、第一次世界大戦時に後方勤務や幕僚として働いた将校は、国防軍将校の最年長グループを形成し、第二次世界大戦の勃発時には将官と大佐の大半を占めていた。彼らは、旧プロイセン将校の美徳に基づいた教育を受け、富裕層または貴族に出自を持っていることが特徴であった。彼らは外交・軍事政策の問題ではナチ政権に基本的に賛同したが、出自や生い立ちに基づく考え方にはかなりの違いが残っており、他の世代に比べて戦争経験が同じであることが認識の同一性を形成することはほとんどなかった。社会・政治的な分野では、自分たちのエリートとしての地位や階級的特権が危ういと考え、伝統的な軍の規律や価値観を維持しようとした世代だった[52]。この世代はほとんどがプロテスタントであった[53]。

（2）に分類される、第一次世界大戦に前線で戦った将校の大多数は中産階級出身で、反自由主義、反物質主義の思想を特徴としていた。この世代の将校は、（1）の世代よりも、国家や個人の生存圏をめぐる闘争と、そこから派生する価値観や規範に関する社会ダーウィニズム的な考え方にはるかに共感していた。彼らは、君主政とその階級社会が戦時社会の社会問題を十分に解決しなかったことを批判した。第二帝政期の政治的・軍事的エリートに対する彼らの批判は、ナチ党が行った非難とほぼ一致するものだった。国防軍参謀将校の大半とナチ党幹部のほ

---

[51] Bernhard R Kroener, »Strukturelle Veränderungen in der militärischen Gesellschaft des Dritten Reiches«, in: Michael Prinz, Rainer Zitelmann(Hg.), *Nationalsozialismus und Modernisierung*, Darmstadt, 1991, S. 271-274.

[52] Kroener, »Strukturelle Veränderungen in der militärischen Gesellschaft des Dritten Reiches«, S. 272-274.

[53] 例えば、国防軍の中枢で勤務していた 25 名の将官について詳細に分析したヨハネス・ヒュルターによると 21 名がプロテスタントで、4 名だけがカトリックであったと明らかにしている。Johannes Hürter, *Hitlers Heerführer. Die deutschen Oberbefehlshaber im Krieg gegen die Sowjetunion 1941/42*, Oldenburg, 2007, S. 28 を参照。

ぼ半数がこの世代に分類される。この世代は将校団のエリート主義的な昇進制度を批判し、将校団の社会的開放や実力に基づいた昇進を要求していたため、(1) の世代に疎まれ、第一次世界大戦後の軍備縮小の際に排除された。1942 年以降、ナチ指導部が総統神話とドイツ兵の人種的優越感を特徴とするその思想を、近代戦の必要条件に適合させると、この世代は特に強く支持した[54]。

第 3 節： 国防軍将校の世界観

第 3 節では、国防軍将校が抱いていた世界観を見ていく。その際、本稿の論点となるロシア・イギリスに対する国防軍将校の認識について主に扱うが、この認識について説明するにはナチ・イデオロギーの受容や戦争観などを含めた包括的な世界観に触れなければならない。なぜなら、国防軍将校の世界観を分析している先行研究では、ほとんどが対ロシア認識や対共産主義・ボリシェヴィズム認識に重点を置き、ナチ・イデオロギーとの関連性について考察しているためである。そしてこのことは、本稿でイギリス認識をメインに扱っている理由でもある。対ロシア認識とは対照的に、対イギリス認識は先行研究において扱われていないことが多く、扱われていたとしても主眼には置かれていない。

国防軍将校の世界観について説明する前に、ナチ・イデオロギー的なロシア像や「ユダヤ・ボリシェヴィズム」に触れる必要がある。このイメージはヒトラーのロシア像の核心を形成していた。彼は、スラヴ民族は自ら国家を形成することが出来ないため、他者に支配されているに違いないと考えていた。そのような理由から、「ユダヤ・ボリシェヴィズム」がロシアを支配しているという考えが現れた。さらにスラヴ人も劣等人種と見なされ、ロシア、ロシア人、ソビエト連邦に対する否定的なステレオタイプと組み合わさることによって、複合的な敵イメージを形成した。伝統的な「アジア」の大国に対する恐怖心とも結びついた。ただし、「ユダヤ・ボリシェヴィズム」というナチ・イデオロギーに基づくイメージは、同様に反共産主義的では

---

[54] Kroener, »Strukturelle Veränderungen in der militärischen Gesellschaft des Dritten Reiches«, S. 274-276.

あるがソ連の政治・社会体制を批判する際に人種的要素を含んでいなかった別のロシア・ソ連像とは区別する必要がある。「ユダヤ・ボリシェヴィズム」が第二次世界大戦後になると消えていった一方で、政治的な反共産主義は連続性を保っていたからだ[55]。

1920 年代の将校らはソ連よりもヴェルサイユ条約やヴァイマル共和国、ポーランドに対して敵対心を持っている者が多かった。一部の将校に関しては、反西欧・反自由主義を掲げ、ソ連との協力を考えている者もいた。対外政策における実利主義的な考えに従って、国内では反共産主義、反社会主義、反民主主義でありながら、同時にボリシェヴィキやソビエト連邦との軍事協力に賛成することすらあった。反軍国主義的なヴァイマル共和国内にいた国防軍将校にとっては、ソ連の「健全な軍国主義」は感銘を受けるに値するものだった。ただし、人種差別的な考えが浸透していることもあり、反スラヴ的・人種差別的なロシア像は「アジアの脅威」というイメージと共に存在し続けた。ナチスが政権を握り、独ソ戦が近づくにつれ、将校たちのロシア像は変化していった。特に軍事的なイメージが急激に悪化した。その理由としては、1937 年に行われた、スターリンによる赤軍幹部層の大量粛清[56]や、フランスに対する圧倒的な勝利による過信などが主に挙げられる。ロシアは「粘土の巨人」であると見なされ、その軍事力は過小評価された[57]。

だがこのイメージは独ソ戦が長引くとさらに変化することになった。司令官の一人として東部戦線に派遣されたゴットハルト・ハインリツィ歩兵大将（General der Infantorie Gotthard Heinrici）の手紙を分析したヨハネス・ヒュルター（Johannes Hürter）によると、独ソ戦における戦争体験によって、ハインリツィは軍事面ではロシアに対してある種の敬意を払うように

---

[55] Wolfram Wette, *Die Wehrmacht. Feindbilder, Vernichtungskrieg, Legenden*, Frankfurt am Main, 2002, S. 25-28.

[56] 反逆を企てていると考えらえた政府指導者や共産党幹部、赤軍幹部などが粛清された。軍の最高幹部 101 名中、91 名が逮捕され、そのうち 80 名が銃殺されたことで、赤軍は著しく弱体化した。大木『独ソ戦』、5-7 頁を参照。

[57] Wette, *Die Wehrmacht*, S. 28-34.

なった。赤軍の人的・物的戦力を過小評価していたが、最初の数週間の損失と敗北にもかかわらず、赤軍が執拗に戦い続け、国防軍に多くの死傷者を出したという事実に特に感銘を受けたことが明らかになっている。 ハインリツィは、この抵抗力の理由を、ドイツの侵攻によって目覚めた愛国心に見出したが、それ以上に、「猛烈に反撃する嫌な動物」のように、すべての資源を生存のための闘争に投入したボリシェヴィキの恐怖体制の効率性に見出した[58]。そしてソ連側の狂信的ともいえる勇気と決意に感銘を受け、彼らに対処するために、独ソでは「冷酷」に行動することが必要であるという戦争観を見出した。ただし、ハインリツィはロシア人とボリシェヴィズムや共産主義を分けて認識しており、ソ連の住民をボリシェヴィズムの犠牲者と見なし、ボリシェヴィズムがもたらしたものは「堕落していて」「汚く」、「原始的な」ものだったとしている[59]。

盗聴記録を用いた先行研究でも、将校のロシア像は同様のものとして扱われている。ザイトルは、捕虜になった将校のステレオタイプなロシア像は、ナチ・プロパガンダやイデオロギーが伝える解釈とは異なっており、東部戦線での戦闘体験が収容者の明確な認識に繋がっていて、当時のナチ・イデオロギーとは反対に、将校の一部はロシアとボリシェヴィズムを区別していたと主張している。ロシア人を劣等人種と侮蔑的に見なすことも、グループ内では広く受け入れられておらず、むしろそれどころか場合によっては真っ向から批判されることもあった。そしてロシア軍の士気、能力、装備は賞賛され、ロシア軍将校団の戦術的な働きも会話の中で肯定的に評価されていた[60]。ザイトルと同様に、グロースは、将校らの対ロシア認識はナチ・イデ

---

[58] Johannes Hürter, *Ein deutscher General an der Ostfront. Die Briefe und Tagebücher des Gotthard Heinrici 1941/42*, Erfurt, 2001, S. 38-39.

[59] Hürter, *Ein deutscher General an der Ostfront,* S. 42-43. ヒュルターが明らかにした将校のロシア観は、独ソ戦に従軍した国防軍将校の心性を分析した別の研究でも提示されている。Walther Lammers, *Zur Mentalität deutscher Generäle bei Beginn des Krieges gegen die Sowjetunion (Juni bis Dezember 1941)*, Sitzungsberichte der Wissenschaftlichen Gesellschaft an der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main, Stuttgart 1990 を参照。

[60] Seidl, *Führerpersönlichkeiten*, S. 41-45.

オロギーよりも昔からある「アジア」に対する偏見や恐怖感情によって形成されていると見なしている。グロースの指摘で重要なのは、ロシアにおける戦争体験が早い時期から将校らの対ロシア認識に良い影響を与え、ナチスやその他の偏見に反論する材料になっていたという点だ[61]。

このように、国防軍将校の対ロシア認識やナチ・イデオロギーの受容の程度、そしてこれらと関連する戦争観については多くの研究で分析されている一方で、将校らの対イギリス認識を焦点に当てた研究は少ない。盗聴記録を分析している研究では、ザイトルとグロースが一つのテーマとして扱っているだけである[62]。両者ともに、捕虜のイギリス認識は肯定的であるという結論に至っているが、細部は異なる。以下ではその点を詳細に見ていく。

ザイトルによると、将校の会話の中では、イギリス人は教養ある人間として高く評価され、将校たちにその自信ある振る舞いによって感銘を与えていたという。捕虜たちは「偉大な国家」イギリスに世界の指導的役割を認め、それどころか一部では「2 つの白人国家」であるドイツとイギリスの同盟を期待する者さえいたとしている。イギリス人に対する批判的な評価は概してほとんど会話の中に見られず、イギリスの政治的システムを将校らは議論の中で圧倒的に肯定的に評価し、ウィンストン・チャーチルとたびたび密接に結びつけていた。彼の指導力と人間性は捕虜に評価されていた。イギリス指導部の戦争遂行方法は収容所内で、戦時国際法の規定を背景にして、批判の根拠にならなかった。ただしこれらの肯定的な評価は、ソ連とのイギリスの協働に対する将校らの明白な批判によって濁ることになったとされている。また、戦時におけるドイツの蛮行に対するイギリスによる判決に関しては、将校らは満場一致で不公平で過度なものだと批判していた[63]。

---

[61] Groß, *Gefangen im Krieg*, S. 287.

[62] ただしグロースに関しては将校ではなく兵士の対イギリス認識しか扱っていない。国防軍兵士の対イギリス認識について、盗聴記録以外を用いた研究の中では、例えば小野寺が分析している。小野寺『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』、183-185 頁。

[63] Seidl, *Führerpersönlichkeiten*, S. 37-40.

グロースもザイトル同様、捕虜となったドイツ兵は、全体としてイギリスを明らかに肯定的にとらえていたと結論付けている。陸軍の盗聴記録にある 70 件ほどの記述の中で、肯定的な態度は否定的な態度の約 2 倍を占めていたという。重要なのは、戦争初期からアフリカ戦までの兵士には、ナチ・プロパガンダに基づく反イギリス的発言も見られたが、戦争体験とイギリスでの捕虜体験が、そのイメージを肯定的にさせたという指摘だ。「結局のところ、戦争が進むにつれて、多くの捕虜の認識も戦争に好意的に変化した。 特に前線での直接の出会いによって、偏見は払拭されたのである」[64]というグロースのコメントに見られるように、彼は戦争体験がロシア・イギリスを問わず敵国認識に良い影響を与えていると主張している。

ザイトル、グロース共に、捕虜の敵国認識は概してそれほど悪くないという結論に至っている。これに対して本稿ではどのような立場をとるのかを第 3 章で扱っていく。

---

[64] Groß, *Gefangen im Krieg*, S. 166

第２章　トレント・パークの捕虜と盗聴記録

第２章では、本稿で扱う史料である盗聴記録の作成経緯と、史料に登場する捕虜たちがどのような人物かを説明する。盗聴記録は、連合国が行った枢軸国兵士に対する諜報活動の一環として行われた盗聴活動の際に作成されたため、なぜこの史料が作成されたかを説明するためには、第二次世界大戦中にありとあらゆる場所で実施されていた連合国による諜報活動についてみていく必要がある。そのため、まず第１節では戦争中に行われた諜報活動全般について扱い、それから第２節、第３節で盗聴活動と盗聴記録という具体的な内容に入っていく。

第１節：連合国による捕虜諜報活動

第二次世界大戦では、各国あわせて約 8000 万人が軍隊に動員され、約 3500 万人が捕虜になった[65]。第一次世界大戦における捕虜数約 500 万～600 万人[66]と比較すると、膨大な数の兵士が捕虜になっている。3500 万ほどの捕虜のうち、連合国の捕虜となったドイツ兵は約 1100 万人であった[67]。以下では、主にドイツ兵捕虜の状況を見ていくが、その全体像をとらえるために、日本兵捕虜、イタリア兵捕虜についても言及している。また、今回史料として取り扱うのは西側連合国に捕らえられた捕虜の記録であるため、ソ連や中国に収容されたドイツ兵士については説明を省き、西側諸国においてどのような捕虜諜報活動が行われていたかを説明していく。

西側諸国による捕虜諜報活動は、主にイギリス、アメリカ、オーストラリア地域で行われた。イギリスでは主にドイツ兵とイタリア兵が、アメリカでは日独両国の兵士が、オーストラリア

---

[65] Kent Fedorowich, Bob Moore, Prisoners of War in the Second World War: An Overview, In: Bob Moore eds., *Prisoners of War and their Captors in World War II*, 1996, Oxford, p. 1.

[66] 藤田久一「国際法から見た捕虜の地位」木畑洋一他編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、2003 年、21 頁。

[67] キース・ロウ(猪狩弘美・望龍彦訳)『蛮行のヨーロッパ』白水社、2019 年、194-195 頁。

では日本兵が活動の対象となった。各地域での活動は独立したものではなく、それぞれが密接に協力していた。例えば、1943 年 2 月に、ガダルカナル島をめぐる戦いで日本軍側の戦局が悪化するに従って、日本兵捕虜が増加したため、アメリカとオーストラリアで捕虜の収容についての協定が結ばれた。その内容は、アメリカ軍が獲得した捕虜の中で、情報価値の高い者はアメリカへ送られ、それ以外の捕虜はオーストラリアで収容されるというものだった[68]。

ドイツ兵は大別すると北アフリカや西部戦線で捕虜になりイギリスやアメリカに送られた者と、東部戦線で捕らえられソ連に収容された者の 2 種類が存在するが、前述したとおりここでは前者について扱う。ドイツ兵も日本兵と同様、戦況が連合国側に傾くにつれその捕虜数が増加していくが、戦争前半は捕虜になる者は少なかった。例えば、1940 年 3 月までにイギリスで捕虜となったドイツ軍将兵の総数はわずか 257 名であり、1941 年の半ばでも、イギリス周辺で捕虜となった総数は 3,800 名以下であった[69]。そして 1941 年時点ではドイツとイギリスの戦争は主に海上と空で行われたこともあり、海軍兵および空軍兵の捕虜がほとんどであった[70]。

転機となるのは、北アフリカ戦線における 1943 年 5 月のアフリカ軍団の降伏である。これによって大量のドイツ兵が捕らえられることになった。1943 年の夏までに、50 万人を超えるイタリア兵と相当な数のドイツ兵が捕虜になった[71]。1944 年 6 月 6 日のノルマンディー上陸作戦以降は、それまでに比べて圧倒的な数のドイツ兵が捕虜になった。例えば、アメリカ軍は、45 年の 4 月と 5 月の短期間で約 180 万人のドイツ兵を捕らえている。最終的に、累計約 380

---

[68] 終戦までに、オーストラリアには約 5000 人の日本兵捕虜が存在していた。秦郁彦「太平洋戦場の日本人捕虜(1)」『拓殖大学論集』1 巻 2 号、1993 年、224-231 頁を参照。

[69] Bob Moore, Axis prisoners in Britain during the Second World War, In: Bob Moore eds., *Prisoners of War and their Captors in World War II*, 1996, p. 19.

[70] Kent Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence 1939-42, *Intelligence and National Security*, Vol. 14, No. 2, 2008, pp. 156-178, p. 160.

[71] Fedorowich, Bob Moore, Prisoners of War in the Second World War, p. 1.

万人がアメリカ軍の、約 370 万人がイギリス軍の捕虜になった[72]。終戦時には、約 96 万人の枢軸国兵がイギリスおよび世界中のイギリス管理下の収容所に収容され、そのうち約 60 万人がドイツ兵、36 万人がイタリア兵、8,000 人が日本兵であった[73]。だがドイツ兵捕虜の中でイギリス本国内に収容されたのは 38 万人ほどであり、残りはカナダやオーストラリアといったイギリス連邦諸国、もしくはアメリカへ送られた[74]。

ノルマンディー上陸作戦が行われたとき、フランス国内には大量の捕虜を収容する空間も収容施設もなかったため、捕虜は海を渡ってイギリスへと送られた。その後、イギリスに集められた枢軸国捕虜のうち、親ナチ的考えを持つドイツ人捕虜は全てアメリカかカナダに送るようにというイギリス政府の方針に従ってカナダへと送られた。だが傷病者やドイツ国内に収容されているイギリス兵捕虜との交換に利用できる可能性がある者、有用な情報を引き出せそうな者はイギリスに残り続けた[75]。

連合軍による捕虜諜報活動の中核となったのは統合詳細尋問センター（Combined Services Detailed Interrogation Center。これ以降 CSDIC と呼ぶ）という機関である。この機関は枢軸国側全体の戦術や軍事技術に関する情報を集めるために 1939 年に創設された組織だった[76]。CSDIC は英米連合軍によって、主にカイロ、ニューデリー、ブリズベーンを筆頭として、5 大陸で共同運営される機密尋問センターであった[77]。CSDIC は当初、尋問によって捕虜から情報

---

[72] キース・ロウ『蛮行のヨーロッパ』、194-195 頁。この膨大な人数全員を連合国の収容所に収容することは不可能だったため、アメリカ軍はドイツ本土に広大な囲い地を用意してその中に捕虜を閉じ込めた（「ライン牧草地 Rheinwiesenlager」と呼ばれ、ドイツに計 16 個存在した）。

[73] Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence, p. 157.

[74] Moore, Axis prisoners in Britain during the Second World War, pp. 19-46.

[75] Moore, Axis prisoners in Britain during the Second World War, pp. 19-46.

[76] 小野寺「ナチズム研究の現在 1　史料としての捕虜盗聴記録の可能性」、2 頁。

[77] Römer, *Kameraden*, S. 33.

を聞き出そうとしていた。尋問は有効な情報収集の手段であったが、尋問を受ける捕虜に協力に意思がない場合には、その効果を発揮しないことも多く、成功するかどうかには尋問官の技量と経験や、捕虜との信頼関係を築けるかどうかにかかっていた[78]。そのため、CSDIC は尋問以外に捕虜から情報を引き出すことが出来る手段を模索するようになる。その手段とは盗聴であった。

アメリカにおいても、CSDIC が諜報活動に関わっていた。1941 年夏にイギリスとアメリカが諜報活動の協力を強化したことがきっかけとなり、アメリカ陸海軍の共同尋問センター(Joint Interrogation Center。これ以降 JIC と呼ぶ)が設立された[79]。以降アメリカでは CSDIC よりもこのセンターが主な役割を果たすようになる。JIC は陸軍省と海軍省の共同で運営され、西海岸と東海岸にそれぞれ設置された。具体的にはカリフォルニア州のフォート・トレイシー(Fort Tracy)とバージニア州のフォート・ハント(Fort Hunt)の二か所である。フォート・トレイシーには日本人の捕虜が主に送られ、尋問された。フォート・ハントには主にドイツ兵とイタリア兵が送られ、収容されていたが、両収容所は厳密に区別されているわけではなく、フォート・ハントに日本兵が収容されることもあった。反対に、上級将校や情報将校といった機密情報を扱う立場の日本兵捕虜は、陸・海軍の中枢に近いフォート・ハントに移送された[80]。

---

[78] Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence, pp. 168-169. オーストラリアで行われた日本兵に対する尋問を例にすると、尋問の手順は以下のとおりである。(1)予備尋問として、戦場で戦闘命令や組織、配置、戦略や士気を質問。(2)身元確認後、司令部に送られ、計画や戦略について徹底的な尋問。これは後に照会するため、また情報の体系的な目録を作成するためであった。(3)収容所にて、再度詳細な尋問という流れで行われた。ケント・フェドロヴィッチ(渡辺知訳)「敵を知る—オーストラリアにおける軍事諜報活動・政治戦・日本人捕虜、1942-45 年」木畑洋一他編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、2003 年、109-141 頁参照。

[79] Römer, *Kameraden*, S. 33-34.

[80] 中田整一『トレイシー　日本兵捕虜秘密尋問所』講談社文庫、2012 年、64 頁。

アメリカの両収容所が他の収容所と決定的に異なるのは、捕虜の会話を盗聴していた点である。捕虜を収容していた部屋には隠しマイクが設置され、常に捕虜の会話に聞き耳を立てていた。直接捕虜を尋問したのちに、捕虜を隠しマイクを設置した部屋に移し、そこで他の捕虜と自由に交流することを許可する。そうすることで捕虜の警戒心が解け、抑制が無くなり、会話を促すことに成功した。尋問センターで得られた情報は、陸軍情報部(MIS)の手によって国内外の諜報部門に伝達された[81]。アメリカの活動はこのようなものだが、これらの活動は、盗聴活動が先駆的に行われたイギリスを手本としたものである。

イギリスは、ドイツ兵に対する諜報活動が行われたもう一つの主要な場所である。イギリスでは、CSDIC を主軸に尋問と捕虜の会話の盗聴活動が行われた。CSDIC は 1939 年 10 月 26 日に設立された。当初は、ロンドン塔に収容された捕虜の尋問にあたるだけの小さな機関だったが、収容人数の問題と、将校と一般兵を分けるようにという当局からの要請に応えられないことが原因で、1939 年 12 月 12 日、CSDIC はロンドン北部に位置するトレント・パークへ（Trent Park）と移された[82]。トレント・パークに移転して以降、CSDIC は通常の尋問に加えて、盗聴活動を本格的に行うようになる[83]。

まずドイツ兵捕虜は、まず初めに通過収容所（Durchgangslager）で前もって選別され、軍事的な機密事項を知っている者は詳細に尋問され、トレント・パークへ送られた。さまざまな抜け目のない策略によって、CSDIC は捕虜から軍事的な知識を引き出そうと試みた。会話をコントロールするために、亡命者やスパイとして協力を惜しまない捕虜が投入された。捕虜はほぼ同じ階級だが、異なる部隊と兵科でひとまとめにされた。兵士たちは、捕虜になってからわずか数日から数週間の間にトレント・パークへ送られた[84]。

---

[81] 中田『トレイシー　日本兵捕虜秘密尋問所』59-62 頁。

[82] Bob Moore, Axis prisoners in Britain during the Second World War, S. 20.

[83] Neitzel, *Abgehört*, S. 12-13.

[84] Neitzel, *Abgehört*, S. 12-13.

さらに捕虜の数が増えると、トレント・パークの収容所だけでは捕虜を収容しきれなくなったため、1942 年 7 月には、ロンドン西部のチェシャムに位置するラーティマー・ハウス（Latimer House）や、ラーティマー・ハウスからおよそ 15 キロメートル離れた場所に位置しているウィルトン・パーク（Wilton Park）に新たな収容所が置かれた。ウィルトン・パークでは主にイタリア兵が盗聴されていた。さらに 1944 年にはフランスでの戦闘で捕らえられた捕虜のために、ケムプトン・パーク（Kempton Park）やディバイザズ（Divizes）に尋問収容所が設立された[85]。盗聴のための新たな収容所が設立されると、トレント・パークはドイツ国防軍将校を長期間収容し、彼らの会話を盗聴する特別な収容所として使用されることになった。

第 2 節：トレント・パークにおける盗聴活動と盗聴記録

第 2 節では、トレント・パークにおいて盗聴活動がどのように行われたかを概観したうえで、史料としての盗聴記録の性質について説明していく。

トレント・パークが国防軍将校のために利用されるようになってから収容された最初の将校は、ルードヴィヒ・クリューヴェル（Ludwig Crüwell）だった。彼は 1942 年 5 月 29 日に北アフリカで捕虜になり、長い船旅を経て 8 月 26 日にトレント・パークに到着した。そこからしばらくして、1942 年 11 月 20 日には、クリューヴェルと同様に北アフリカでイギリスの手に落ちたヴィルヘルム・リッター・フォン・トーマ（Wilhelm Ritter von Thoma）が加わった。会話を促すために、時々選ばれた捕虜がトレント・パークへ連れてこられた。例えばハンス=ディートリヒ・ティーゼハウゼン海軍大尉（Hans-Dietrich Tiesenhausen）や、スペイン内戦時代からのトーマのかつての副官ブルクハルト（Burckhardt）少佐といった、将校らに親しい人物が選ばれた[86]。

---

[85] Neitzel, *Abgehört*, S. 13-14. ケムプトン・パークはイギリス軍に、ディバイザスはアメリカ軍に捕らえらえた者が収容された。

[86] Neitzel, *Abgehört*, S. 14. もっとも彼らは数週間だけ滞在し、それからカナダへと移された。

1943 年 5 月のアフリカ軍集団の降伏後、大佐から大将までの 18 人の将校がトレント・パークへやってきた。さらに 1944 年の 6 月下旬、つまりノルマンディー上陸作戦以降、連合軍がフランス、ベルギーそしてドイツに進軍する中で捕らえた新たな捕虜が、大量にトレント・パークに収容されることになった。1945 年 4 月には将校の数がトレント・パークに収容できないほど増加したため、ラーティマー・ハウスなどの別の収容所に連れていかれた。1942 年 8 月から 1945 年 10 月 19 日に閉鎖されるまで、累計 84 名のドイツ国防軍将官[87]がトレント・パークに滞在していた。そのうえ、少なくとも 22 人の大佐が収容されていた。1945 年 10 月までに一時的にイギリスの尋問施設に滞在していた将官の総数は、302 人に達していた。そのうち 82%(248 人)が 1945 年 4 月以降にイギリスに収容された。一般的に、どこの国の捕虜になったかは関係なく、国防軍将校捕虜はイギリスで尋問された[88]。

盗聴係は約 12 人からなる分隊に分けられ、M ルームと呼ばれる盗聴活動を行う部屋に待機していた。各分隊は 2 交代制であり、常に最大限の集中力を維持することが不可欠だったため、速記は奨励されなかった。担当者は、予備尋問で捕虜がどんな質問をされたかを知っていたため、捕虜から予想される反応を事前に知っていた。このやり方は、尋問中の捕虜の供述が正確かどうかを確認する手段にもなった。ドイツ語の知識があるイギリス軍将校ですら、俗語や軍事的専門用語を含む口語のドイツ語を聞き取ることが出来なかったため、盗聴係としてドイツやオーストラリアからの難民（その多くはユダヤ人だった）に訓練を施したのちに活動に投入した[89]。さらに第 1 節でも説明したように、捕虜に混ざって、主に亡命者がスパイとして会話に混ざり、活発な会話を促した[90]。トレント・パークには捕虜の部屋 12 部屋に盗聴器が取り付

---

[87] 少将から上級大将までのことを指す。

[88] Neitzel, *Abgehört*, S. 14-15.

[89] Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence, p. 170；Hellen Fry, *The walls have ears*, London, 2020, p. 30.

[90] 彼らはおとりバト（Stool Pigeon）と呼ばれ、盗聴記録には SP というイニシャルで登場する。

けられ、記録すべき会話が捕虜の間で交わされるとレコードに最大 7 分録音された。個人的な判断が許されなかったため、盗聴係が記録すべきと見なした会話はまず録音され、それから会話が文字に書き起こされた。そしてその記録が確認されると、翻訳とタイプ打ち作業が行われた[91]。

このような盗聴活動は他の収容所でも行われていたが、トレント・パーク特有の盗聴戦略として、アバフェルディ卿（Lord Aberfeldy）という人物を将校らの世話役にするというものが存在する。彼は実際にはイアン・トムソン・モンロー（Ian Thomson Munro）という人物であったが、スコットランドの名門貴族だと偽り、捕虜からの信頼を勝ち取った。彼の役割は通訳として国防軍将校とイギリス軍との間を取り持つこと、CSDIC の意図に適い、会話を引き出すことだった。捕虜から信頼されるために、彼は国防軍将校らの長時間の散歩に同行し、収容所での生活を助けるためロンドンに生活用品を買い出しに行き、会話相手にもなった[92]。それ以外にも、将校らは少額ではあるが給与金をもらい、食堂で自由にタバコやビールといった嗜好品を買うこともできた。これらすべての快適さが、将校らに安心感を与え、潤滑な会話を促すための作戦だった[93]。

ここからは盗聴記録の種類と量についてみていく。1939 年 9 月から 1945 年 10 月までに、10191 人のドイツ兵捕虜がトレント・パーク、ラーティマー・ハウス、ウィルトン・パークに送られた。CSDIC は 13951 件もの盗聴記録を作成した。盗聴記録は話者が何者かによって 6 種類に分類された。一つ目が SRA（Special Reports Air Force）と呼称される、空軍兵士同士の会話を記録したもので、3609 人の捕虜から 5795 件作成された。二つ目が SRM（Special Reports Army）と呼称される、陸軍兵士同士の会話を記録したもので、2748 人の捕虜から 1254

---

[91] Fry, *The walls have ears*, 2020, p. 30. ラーティマー・ハウスやウィルトン・パークでは盗聴されていた部屋が 30 部屋と、トレント・パークよりも多く、尋問室にも盗聴器が設置されていた。Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence, p. 169 を参照。

[92] *The walls have ear*s, pp. 107-109.

[93] Neitzel, *Abgehört*, S. 20-21.

件作成された。三つ目が SRN(Special Reports Navy)と呼称される、海軍兵士同士の会話を記録したもので、3838 人の捕虜から 4826 件作成された。四つ目が SRX(Special Reports Mixed)と呼称される、異なる兵科間で交わされた会話を記録したものであり、2076 件作成された[94]。

そして上記 4 つの記録とは別に、SRGG(Special Report German Generals)と呼ばれる将校の特別な記録が 1302 件、GRGG（General Reports German Generals）と呼ばれる 2～5 日間で行われた将校の複数の会話をまとめた記録が 326 件存在する。GRGG に関しては、録音された会話に加えて、マイクロフォンの届かないところで行われた会話をイギリス軍諜報将校が盗み聞きして、もしくは諜報将校自身が捕虜と会話して得た情報も含まれている。以上をまとめると、SRA、SRM、SRN、SRX は 1939 年 9 月から 1945 年 10 月にかけて、主に一般兵によって交わされた会話を記録している。SRGG と GRGG は 1943 年 5 月以降に将校が行った会話を記録したものとなっている。将校らの記は全部で 10000 ページほど存在していて、盗聴記録の全ストックのおよそ 20%に達している[95]。

第 2 節の最後に、本稿で使用する史料集である『盗聴されていた』について説明し、盗聴記録の史料としての特性について述べる。『盗聴されていた』に収録されている盗聴記録は、トレント・パークには主に国防軍将校が収容されていたこともあり、ほとんどが SRGG もしくは GRGG のどちらかとなっている。合計で 189 件の盗聴記録が収録され、それぞれ 1 から 189 まで番号が割り振られている。ナイツェルは将校らの会話を(1)政治やナチ・イデオロギー、ドイツの未来について(2)戦争犯罪について(3)1944 年 7 月 20 日のヒトラー暗殺未遂について(4)イギリスとの協力について、という 4 つのテーマに分類して紹介している。1 番から 82 番までの記録が(1)の、83 番から 144 番までの記録が(2)の、145 番から 167 番までの記録が(3)の、168 番から 189 番までの記録が(4)の会話に関する記録となっている。基本的にはトレント・パ

---

[94]Neitzel, *Abgehört*, S. 494；Hoerkens, *Unter Nazis?*, S. 12.

[95] Neitzel, *Abgehört*, S. 16. SRGG および GRGG が作成される前に捕虜になっていたトーマとクリューヴェルの会話に関しては、1943 年 5 月以前の記録は SRM に所蔵されており、陸軍兵士の盗聴記録として扱われている。

ークで盗聴された会話を記録しているが、76 番、77 番、135 番、152 番の記録はトレント・パークではなくラーティマー・ハウスに収容されていた捕虜の盗聴記録となっている[96]。

盗聴記録は、エゴ・ドキュメントである[97]。エゴ・ドキュメントとは、日記や手紙、回想録などの「1 人称」で書かれた史料のことを指し、オーラル・ヒストリーや個人の証言も含まれる[98]。盗聴記録が他のエゴ・ドキュメントと決定的に異なるのは、会話を記録したものという点だ。盗聴記録においては話の飛躍や、かみ合わない会話が登場するが、これは様々な要素が次々と脈絡なく繋がる会話特有のものであり、一貫性や論理性が求められる「書く」という行為から生まれた史料に比べて、感情や願望となどの主観性を分析するためにより適している史料だといえる[99]。

第 3 節：トレント・パークの国防軍将校捕虜

本節では、『盗聴されていた』に登場するトレント・パークに収容されていた国防軍将校が全体としてどのような集団だったのかを説明し、その後実際に第 3 章で取り扱う将校のプロフィールを個別に取り扱う。具体的には、階級や生年月日などといった事柄、捕虜になった日時、CSDIC による評価である。

『盗聴されていた』に登場する捕虜の階級の内訳としては、将官が 63 人、大佐が 14 人、中佐が 5 人、少佐が 3 人、中尉が 2 人、少尉が 1 人の合計 88 人である。将官の内訳は上級大将が 1 人、大将が 8 人、中将が 24 人、少将が 30 人であり、大半が陸軍に所属していた。11 人が空軍、4 人が海軍、1 人が武装 SS に所属していて、残りの 72 人が陸軍となる。プロテスタ

---

[96] Neitzel, *Abgehört*, S. 9-10.

[97] 小野寺「ナチズム研究の現在 1　史料としての捕虜盗聴記録の可能性」、2-4 頁。

[98] 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年、1-3 頁。

[99] 小野寺「ナチズム研究の現在 1　史料としての捕虜盗聴記録の可能性」、4 頁。

ント 41 人、カトリック 12 人と、捕虜全体のうち約 3 分の 2 の宗派が判明しており、出身地は大半がプロイセン出身となっている。生年月日に関しては、将官は全員 1882 年から 1910 年までに生まれており、1895 年、1896 年に生まれた者が最も多い[100]。

ここからは将校個別のプロフィールについて説明していく。その際、ナイツェルが『盗聴されていた』にまとめている将校の略歴と、CSDIC によって作成された捕虜に対する評価を参考にして説明する。CSDIC が作成した捕虜の人物描写は、主にアバフェルディ卿によって作成されたものとなっている。第 2 節でも説明したように、彼はトレント・パークの捕虜たちと共同生活をし、捕虜たちと親しくなる中で彼らの人物像を把握していった。第 3 章において、将校らに親ナチ的・反ナチ的というレッテルを張って説明する場合があるが、この分類は基本的には CSDIC の評価に基づいている。ただし、一部の捕虜は CSDIC に評価されていない場合がある。本稿で CSDIC による評価を書いていない者は、そもそも評価がない将校となる。将校を紹介する順番は、1943 年 5 月以前に捕虜になった者、1943 年 5 月ごろの北アフリカ組、1944 年 6 月以降のノルマンディー組という順で行う。

最も早くに捕虜になったのが、ルートヴィヒ・クリューヴェルだ。クリューヴェルは 1892 年生まれで、最終的な階級は装甲大将、北アフリカでアフリカ軍団の司令官として戦っていたが 1942 年 5 月 29 日に捕虜になった。彼は 1942 年 8 月 22 日から 1944 年 6 月 16 日までトレント・パークに収容され、その後アメリカの収容所に送られた。CSDIC の評価では、彼は「親ナチ派（Nazi clique）」と呼ばれるグループのトップだと見なされ、「愚か」で「うぬぼれが強い」と否定的に評価されていた[101]。

ここからは北アフリカ組の略歴を説明していく。ウルリヒ・ボーズ（Ulrich Boes）は 1911 年生まれで最終階級が中佐、1943 年 5 月 9 日にチュニジアで捕虜になった。彼は 1943 年 6 月半ばから 1944 年 1 月 30 日までトレント・パークに収容され、その後カナダへと送られた。捕虜

---

[100] Neitzel, *Abgehört*, S. 25-26.

[101] Neitzel, *Abgehört*, S. 437-438.

になった時は少佐で、1943 年の終わりに中佐に昇進した。CSDIC の評価は「親ナチ派」の一員で、イギリスに対して断固として対峙していた、というものだ。また彼は「太っていて」「粗野」な男であり、ドイツが敗戦した場合には復讐することを望んでいたと評されている[102]。

ボーズと同日に捕虜になった将校が、ゲルハルト・バッセンジ（Gerhard Bassenge）だ。バッセンジは 1897 年生まれで最終階級が少将、1943 年 5 月 9 日にチュニジアで捕虜になった。1943 年 5 月 16 日以降、戦後にドイツに返されるまでトレント・パークに居続けた。CSDIC によると、彼は「聡明」で、「はっきりとした精神」の持ち主であり、「反ナチ派（anti-Nazi clique）」の柱を担っていた人物で、1943 年 9 月の終わりからは収容所のリーダー的存在になっていた。共産主義化を恐れ、ドイツを降伏させるために、イギリスとの協力に意欲的であったとされている[103]。

ハンス＝ユルゲン・フォン・アルニム（Hans-Jürgen von Arnim）は 1889 年生まれで、最終的な階級は上級大将であり、収容所で唯一の上級大将かつ最も階級が高い者だった。1943 年 5 月 12 日にチュニジアで捕虜になり、1943 年 5 月 16 日から 1944 年 6 月 16 日までトレント・パークに収容され、その後はアメリカへ送られた。CSDIC は、彼の政治的態度を明確に評価しておらず、親ナチ派と反ナチ派の対立の間を右往左往していたと判断した。極度の反共産主義者かつ反ユダヤ主義者だが、積極的にナチ党を支持することはなかった[104]。

ここからはノルマンディー組の略歴になる。本稿で扱う将校で、最も早くに捕らえられたのが、ヴァルター・ヘネッケ（Walter Hennecke）だ。ヘネッケは 1898 年生まれで、最終階級海軍少将と、本稿唯一の海軍出身となっている。1944 年 6 月 26 日にシェルブールでアメリカ軍の捕虜になり、1944 年 7 月 3 日から 1944 年 9 月 12 日までトレント・パークに収容されていた。その後はアメリカの収容所に送られた。

---

[102] Neitzel, *Abgehört*, S. 431-432.

[103] Neitzel, *Abgehört*, S. 430-431.

[104] Neitzel, *Abgehört*, S. 429.

オットー・エルフェルト（Otto Elfeldt）は、1895 年生まれで、最終階級は中将、1944 年 8 月 20 日ファレーズの包囲の際に捕らえられた。1944 年 8 月 23 日以降、戦後に解放されるまでトレント・パークに収容され続けた。トレント・パークに着いた際にナチ式敬礼で挨拶した数少ない将校の一人だが、CSDIC には「反ナチ派」と見なされ、戦時中にはナチ党に反対することを望まなかったが、戦争が終わり次第西側諸国と協力する用意があると評価された[105]。

ディートリヒ・フォン・コルティッツ（Dietrich von Choltitz）は、1894 年生まれで、最終階級は歩兵大将、本稿で扱う将校の中では数少ないカトリックだ。1944 年 8 月 7 日には大パリ軍事総督に任命され、ヒトラーにパリの死守および破壊命令を下されたが従わず、1944 年 8 月 25 日に捕虜になった。1944 年 8 月 29 日から 1945 年 4 月 10 日までトレント・パークに収容された。CSDIC には、おしゃべり好きであけすけな人物であり、可能な限りイギリスに対して自分をよく見せようとしていたと評されている。コルティッツはその気まぐれぶりから他の捕虜からはあまり好かれなかった[106]。

ハインリヒ・エーベルバッハ（Heinrich Eberbach）は、1895 年生まれで、最終階級は装甲兵大将、1944 年 8 月 31 日にアミアン近郊で捕虜になった。1944 年 9 月 6 日以降トレント・パークに収容されていた。CSDIC は、エーベルバッハはかつてナチ党を支持していたが、ナチ体制が犯罪的な集団だと認識し、もはや忠誠を誓う必要はないことに気づいたと評価している。トレント・パークではナチ体制に批判的であり続けた[107]。

パウル・フォン・フェルベルト（Paul von Felbert）は、1894 年生まれで、最終階級は少将、1944 年 9 月 10 日にフランス軍の捕虜になった。1944 年 12 月 28 日から 1945 年 8 月 8 日までトレント・パークに収容されており、1945 年 1 月 3 日には欠席裁判で死刑を宣告されていた。フェルベルトはトレント・パークに送られる前にはイギリスとアメリカの将校に対して協

---

[105] Neitzel, *Abgehört*, S. 441-442.

[106] Neitzel, *Abgehört*, S. 435-436.

[107] Neitzel, *Abgehört*, S. 439-440.

力的だった。彼は捕虜になってから目が開かれたと主張し、CSDIC には、弱い性格ではあるがナチズムに対しては断固とした反対者だと評価されていた[108]。

エーベルハルト・ヴィルダームート（Eberhard Wildermuth）は、1890 年生まれで、最終階級は大佐、1944 年 9 月 12 日にル・アーブルで捕虜になり、1944 年 11 月 5 日からドイツに送還されるまでトレント・パークに収容されていた。彼は戦前はドイツ人民党の党員であり、戦後も官庁に勤めており、他の捕虜と比べてもかなり特殊な経歴である。CSDIC の評価は、彼はかなりの愛国者であり、ナチ体制に激しく反対していたというものだった。高学歴の予備役大佐だった彼は、「狭量」で「明晰」な思考を欠く将官たちの収容所社会において脇に追いやられていたとされている[109]。

ベルンハルト・ラムケ（Bernhard Ramcke）は、1889 年生まれで、最終階級は降下猟兵大将、1944 年 9 月 19 日にブレストの要塞で降伏し、捕虜になった。1944 年 9 月 27 日から 1945 年 4 月 10 日までトレント・パークに収容されていた。ラムケは 1946 年 12 月にフランスに送られ、1951 年 3 月にブレストの戦いで、民間人の殺害や市民の建物を焼き払ったことなどの戦争犯罪を理由に 5 年の禁固刑を言い渡された。CSDIC はラムケを野心的で恥知らずであり、楽観主義的で過度に歪曲された歴史像を持っていると評している[110]。

フェルディナント・ハイム（Ferdinand Heim）は、1895 年生まれで、最終階級は中将、1944 年 8 月 1 日からはブルゴーニュの要塞指揮官に任命され、1944 年 9 月 23 日にブルゴーニュで捕虜になった。1944 年 9 月 28 日から解放されるまでトレント・パークに収容されていた[111]。

ヨハネス・ブルーン（Johannes Bruhn）は 1898 年生まれで、最終階級は少将、1944 年 11 月 22 日にフランスで捕虜になった。1944 年 12 月 28 日から 1945 年 5 月にアメリカに送られる

---

[108] Neitzel, *Abgehört*, S. 443.

[109] Neitzel, *Abgehört*, S. 481..

[110] Neitzel, *Abgehört*, S. 466-467.

[111] Neitzel, *Abgehört*, S. 449-450.

までトレント・パークに収容されていた。CSDIC は、ブルーンは 1944 年秋に捕虜になった将校の中で最も知的な性格の持ち主であり、明確な反ナチだと評価していた。彼はドイツのためにナチ体制を排除し、ドイツの共産主義化を阻止する必要があると考えていたとされている[112]。

ゲルハルト・フランツ（Gerhard Franz）は、1902 年生まれで最終階級は少将、1945 年 4 月 8 日に捕虜に。1945 年 5 月 5 日から 7 月 5 日までトレント・パークに収容されていた。CSDIC の評価では、フランツは好奇心にあふれた、平均以上の知性がある人物だとされており、ナチ体制に対して強烈に反対していることを隠さなかった。

マクシミリアン・シリー（Maximilian Siry）は 1891 年生まれで、最終階級は中将、1945 年 4 月 10 日にイギリスの捕虜になった。シリーもコルティッツ同様カトリックである。シリーはトレント・パークではなくラーティマー・ハウスの方へと送られた将校である。

以上、本稿で扱う将校の略歴についてまとめたが、最後に分析対象全体について総括する。メインとして扱う捕虜の全体数は 15 名で、1943 年 5 月までに北アフリカで捕虜になった者が 4 名、残り 11 名が 1944 年 6 月以降にフランスで捕虜になった者となっている。CSDIC から親ナチ派と見なされていた者が 3 名、反ナチ派と見なされていた者が 8 名、中立ないし評価不明であった者が 4 名となっている。評価が書かれていない者に関しては、『盗聴されていた』に収録されている彼らの発言を概観した限りでは、全体として反ナチ的とまではいかなくともナチ体制から距離を取る傾向にあった[113]。

第 3 章　ドイツ国防軍将校の敵国認識

第 3 章では、第 2 章第 3 節で紹介した将校らの発言を取り上げ、彼らがどのような敵国認識を抱いていたのか、その認識は主に何を根拠としていたのかを見ていく。その際、煩雑さを避けるために、将校の階級を書かず、名前を挙げる際は姓を省略している。史料を翻訳する上で、階級が異なる者同士の会話は、階級が低い方が高い方に敬語を使うように、階級が同じ者同士

---

[112] Neitzel, *Abgehört*, S. 433.

[113] 分析対象の会話相手は説明していない。

の会話はどちらも敬語を用いないように訳している。エーベルバッハについては、特に言及がない場合には父親の方を指す[114]。

第 1 節：対ロシア認識

まず第 1 節では国防軍捕虜たちの対ロシア認識を見ていく。捕虜たちのロシア像は全体として良いものとは言えず、ロシアの軍事能力を評価することはあったものの、ロシア人やロシアと言う国に対しては否定的な発言が多くみられる。ロシアに関する発言の中で、共産主義の脅威、「未開」で「野蛮」なロシア、占領・報復への恐怖や不安といった 3 点が頻繁に登場し、ロシアについて語る際に主なテーマとなっている。

共産主義の脅威というテーマはロシアに関する発言において非常に多く表れる。そのことを端的に表しているのはラムケの次の発言である。

> ラムケ：世界史はいつか、総統があらゆる民族に対して強大なユダヤ人の危険を認識し、ヨーロッパにとって東部における「ユダヤ共産主義（jüdischkommunistische）」の危険を認識したことを正しいと見なすだろう。それはかつてジンギスカンという名であり、アッティラという名であった。今回は「ユダヤ・ボリシェヴィズム（jüdische Bolschewismus）」であり、遠いアジアの果てからヨーロッパに侵入してきており、我々は抵抗しなければならなかった。ひょっとしたら、我々が西ヨーロッパの小国の中で見通しが利かず、取るに足らないチェコスロバキアやズデーテン地方、ダンツィヒ回廊やそのようなもの、そしてその背後にいるイギリスのせいで、フランスやベルギー、ドイツとあらゆる小さな利害対立によって互いに喧嘩しあっていたということを、歴史はのちに教えることになるだろう。そして東からの脅威が何なのかを理解していなかった。この中で、総統の主な政治的指針

---

[114] エーベルバッハの息子である　は、そもそも父親との会話以外が『盗聴されていた』に収録されていないため、盗聴記録において発言者の名前に「息子」としか登場しない。

や方針は確かに残っている…[115]

ラムケの発言は、共産主義とユダヤ人の陰謀、アジアの脅威が混ざった、ナチ・イデオロギーに典型的な「ユダヤ・ボリシェヴィズム」像を受容したものとなっている。ラムケは第 2 章第 3 節の説明でも見て取れるように急進的なナチであるから、この発言を国防軍将校の一般的な認識だと見なすことはできない。だが、共産主義およびボリシェヴィズムに対する恐れや不快感は、ヘネッケのようなナチ的な意見から距離を置いていた捕虜の発言にも見ることができる。「私は、ここの人びと（イギリス人）がボリシェヴィズムの圧力にさらされているという印象を持ち続けている。ロシアと同盟を結んでいると突然告げられた時、我々が感じた不快感（Unbehagen）をいつも思い出す。それはとても馬鹿げていた。彼らがロシアと結んでいる同盟も同じくらい馬鹿げている」[116]というヘネッケの発言からは、イギリスが共産主義を掲げるソ連と手を組んだことに対する不快感が読み取れる。

共産主義の脅威と同様に、盗聴記録にたびたび現れるのが、ロシアを「未開」、「野蛮」と見なす発言だ。

シリー：大声で言うべきではないが、我々はあまりにも優しすぎた（zu weich）。我々は今、あらゆる残酷さの瓶の中にいるのだ。だが、もし我々が残虐行為を 100%実行していたら—人々を完全に消滅させていたら、人々は何も言わなかっただろう。この半端な措置、これが常に間違いだった。東部では、私は軍団に提案した—何千人もの捕虜が戻ってきて、そこに人がいなかったため、人々が彼らを見守ったということだった。フランスでは、これは非常にうまくいった。というのも、フランス人はとても堕落した人間であるため、連中に「お前はそこの捕虜集合所に送られる」と言うと、この愚かなサル共は実際にそこに行った。だがロシアでは、装甲部隊の先端と後に続く密集した隊列との間に 50km から 80km のギャップがあったため、おそらく 2 日から 3 日かかった行進だった。〔…〕そこで

[115] Neitzel, *Abgehört*, S. 174-175. GRGG253、1945 年 1 月 26-27 日の記録。

[116] Neitzel, *Abgehört*, S. 112-113. GRGG152、1944 年 7 月 1-2 日の記録。

私は「そんなことは上手くいかない。人々の足を切断するか、足を折るか、右手前腕を折らなければならない。そうすれば彼らは今後 4 週間戦えなくなり、そうすれば彼らは回収されるようになる」と言った。叫び声（Geschrei）の代償は、私が言ったように人々の足をこん棒で叩くだけで十分だ。もちろん、当時は私もそのことを完全に理解してなかった。だが今ではそれを認めている。我々は十分ではなく、十分に野蛮ではなかったため、戦争を遂行することはできないことを見てきた。ロシア人は容易くそういうことをやる。[117]

シリーの発言は、国防軍はもっと残酷に、苛烈にふるまうべきだった、十分に野蛮になれなかったのに対し、ロシア人はいとも容易く野蛮に行動するだろうと見なしているものであり、ロシア人の野蛮さとドイツ国防軍の不十分さを対比させている[118]。

シリーの発言はロシアを否定的に見たものだが、ロシアを「未開」、「野蛮」と見なす発言が必ずしも否定的なロシア像に結びついているとは言えない事例もある。ロシアを「未開」だとする一方で、ロシア人の戦争遂行力を賞賛している者がいた。ハイムの「ロシア人は優れた兵士だ。かつてフリードリヒ大王はロシア人の毅然とした態度（Standfestigkeit」を賞賛していた。ロシア人は並外れて呑み込みの早い（gelehriger）学生だ」「ロシア人は戦争から、フランスでのすべての戦役などから、計り知れないほど多くを学び、理解し、そこから得た教訓を、この指導者団に素早く知らしめていた」、「間違いなくスラヴ人は頭がよくなく、理解力も劣る」「だがスラヴ人には西ヨーロッパ人に対してとてつもない利点がある。彼らには死は意味をなさない、全く意味をなさないということだ！ヨーロッパのスラヴ人でも、スラヴ人は死に対する考え方が我々とは全く違う。アジア的な考え方をする傾向が若干あり、その結果、スラヴ人はとてつもない不動心を持っている。森にいるパルチザンは、ほとんど森の動物だった」「そのよう

---

[117] Neitzel, *Abgehört,* S.310. SRGG1203、1945 年 5 月 6 日の記録。

[118] 国防軍将校ではないため本文では扱っていないが、武装親衛隊所属の将校も同様にロシア人の残忍さを強調している。「ロシア人が人々に対して森を根扱ぎ引っこ抜くように残忍であることを我々は知っている」。Neitzel, *Abgehört,* S.160. GRGG226、1944 年 11 月 20-21 日の発言を参照。

な民族と戦って初めて、最終的に我々がどれほど都市化したかを知った」[119]といった発言がそのことを示している。ハイムはロシア人が死を恐れずに戦う優れた兵士であり、ドイツ軍よりも巧みに戦ったと賞賛している一方で、彼はロシア人パルチザンを「森の動物」と表現したり、「間違いなくスラヴ人は頭がよくなく、理解力も劣る」と語っており、根本的にロシア人を蔑視していることがうかがえる。このことは、将校らにとってロシアに対する賞賛と偏見は並列しうるものだということを明らかにしている。

ロシアに関する発言の中で、最も頻繁に政治的立場に関係なく現れるのが占領・報復への恐怖や不安といった感情である。ヘネッケの「ロシア人が全てを奪って食い尽くすだろうが、それが最低限だ、彼らは飽くことを知らない。兄弟よ。いや、全くもって恐ろしい！一番いいのは、西部で停戦し、イギリスと共にロシア人と戦うことだろう。」[120]という発言は占領に対する恐怖を表している。「ロシア人は復讐に燃えている」[121]という発言や、エーベルバッハの「私たちがそうしたからロシアがそうしているのではなく、彼らには復讐の感情（Rachegefühl）があるからだと思う」という発言からは、ロシアによる報復を恐れていることが読み取れる。フェルベルトの「ロシア人のメンタリティを理解する必要がある。数百キロメートルの土地が我々によって破壊され、彼らが何をしたかどうか関係なく、我々は単に彼らを吊るし、射殺し、撲殺し、殺害した。これらの人びとは今、ドイツに対して解き放たれている。彼らがドイツ人を豚、犯罪者、そして畜生（Aas）は殺されなければならないと見なしているのは明らかだ。そして誰が犯罪者なのか？それはインテリとナチスだ。それは明白だ！」[122]という発言が示しているように、彼は東部戦線で国防軍が行ってきた戦争犯罪が、結果としてロシアによる報復を強めるだろうと見なしていた。

---

[119] 全て Neitzel, *Abgehört*, S.214-224. SRGG1271、1944 年 9 月 23 日の記録である。

[120] Neitzel, *Abgehört*, S.115. GRGG156、1944 年 7 月 8-10 日の記録。

[121] Neitzel, *Abgehört*, S. 235. SRGG495、1943 年 10 月 21 日の記録。発言者は不明。

[122] Neitzel, *Abgehört*, S. 414. GRGG256、1945 年 2 月 3-5 日の記録。

第 2 節：ノルマンディー以前から存在する対イギリス認識

第 2 節および第 3 節では、捕虜たちの対イギリス認識についてみていく。その際、第 2 節ではノルマンディー以前に捕虜になった者の認識を取り上げる。具体的には、歴史事象、イギリスの国民性などといった、戦争に関連する事柄以外を引き合いに出した反イギリス認識が挙げられる。このような反イギリス認識は、主に親ナチ的傾向の強い人物に見られる。

> ラムケ：ご存じの通り、当時は、アメリカやイギリスなどが、途轍もない数の大きな過ちを犯していた。我々は決して忘れてないし、決して理解できない。1918 年、戦争は終わり、14 箇条の原則などがあった。そしてついに停戦条件が提示され、降伏条件が示された。そして 4 年の封鎖（Blokkade）を耐え忍び、あらゆる物資の供給からぐるりと切り離され、代用品しかなく、高齢者と赤ん坊の死亡率が信じられないほど高いという最大の苦難にのみ耐えてきた国民が、1920 年と 1921 年に今度は 20 万頭の乳牛を無理に引き出され、封鎖はさらに 3 年維持されたということだ。この 3 年間の封鎖と 20 万頭の乳牛、その他緊急で必要だったすべての物や、少なくとも物資を交換するための荷車。収穫後のジャガイモを東部から西部へ迅速に運ぶために、50 万人の犠牲者を出した。これは公には現れない冷酷な殺人だ。世間では「彼らがユダヤ人をどう扱ったを見るんだ。彼らが、ハイドリヒが殺されたチェコスロバキアの村をどのように殺戮したかを見るんだ。見てみろ、かわいそうな人たちだ！」ということが吹聴されているが、この 50 万人が 1919/1920 年に冷酷な方法でどうやって殺されたのかについては、誰も語らない。[123]

ラムケは、イギリスが行った海上封鎖を例に出して、ユダヤ人殺害を相対化し、イギリスを非難している。また、ラムケは、自身がフランスを撤退する際にブレストを破壊していったことをコルティッツに戦争犯罪だと批判されたことに対して、過去にフランス革命時にイギリス

---

[123] Neitzel, *Abgehört*, S.146-148. GRGG209、1944 年 7 月 7-10 日の記録。ハイドリヒとは、国家保安本部長官で親衛隊 No2 であり、ユダヤ人絶滅政策を推進した人物である。彼は 1942 年 6 月にプラハ滞在中に暗殺された。芝健介『ホロコースト』中公新書、2008 年、67 頁を参照。

が行ったトゥーロン港の包囲を引き合いに出して自身を正当化している。

コルティッツ：貴官らは町を完全に破壊したのか？

ラムケ：完全に滅ぼした！

コルティッツ：当然だがそれは戦争犯罪だ。

ラムケ：いや違う。私は電気鉄道を…破壊した。

コルティッツ：誰もそんなことは話していないのは明白だ。なぜ民間人の家を破壊したんだ？

ラムケ：理由は言った。戦争に必要な場所であり、私にとって邪魔になっていた場所を爆破したんだ。

コルティッツ：だからラムケ、もちろん戦争犯罪だ！

ラムケ：もちろんだ！だがイギリス人は我々にそのやり方を教えた。ネルソンは 1793 年にトゥーロン全部を焼き払い、焼け落ちた。

コルティッツ：なぜ彼はそんなことをしたんだ？

ラムケ：フランスに港を渡したくなかったからだ。[124]

ラムケと同様の態度は、クリューヴェルとアルニムの会話においても見られる。やはりクリューヴェルも親ナチ的傾向が強い人物である。彼らは、フランスにおいてレジスタンスによってドイツ人が殺されたら、報復としてフランス人を殺すという措置について話していた。だが反乱を防ぐために人質を取るという手段は、イギリスもインドにおいてやっていたため、イギリスに批判されるいわれはないとしている。

アルニム：彼はどこかの事例から聞いた。人質が殺されるのは昔から好きではない。どこ

---

[124] Neitzel, *Abgehört*, S.263-264. GRGG214、1944 年 10 月 20-23 日の記録。

かでドイツ人が何人か殺されたら、そのために 10 人のフランス人が殺される。

クリューヴェル：ええ。神よ。ですが苦境のときには—それは戦時法(戒厳令)です—それは国際戦時法です。

アルニム：正直に言うと—私は人を選んで連れていくだろう。つまり例えば犯罪者などを連れていく。

クリューヴェル：ええ。神よ。ですが、部分的には善良な者を連れて行かなければなりません。見せしめの効果があります。ですがそれは文句を言うことではありません。私も恐ろしいと思います。私がパリ総督（Gouberneuer）で無くてよかった。ええ。ですが、上級大将殿はどうしたいのですか？上級大将殿が殺さなければ、私たちは殺されるでしょう。

アルニム：ああ。自ら殺害し始めた者、つまり最初に殺害し始めた者が、警察の助けを借りて、あるいは警察部隊の助けによって自ら捕まった。

クリューヴェル：ええ。それが出来るなら、人質を取ることは全く必要が無いのですが、ですがそういうものです。私は人生で人質を殺させたことは無い—なぜなら苦境に陥ったことがないからです—人質を取ったことはありますが、ありがたいことに、殺す必要はありませんでした。それが戦時法です。またも典型的なイギリス人的発言として、彼らはこう言います。「フン人ども—奴らは皆そうする！」と。そして後方では奴らは他の者にこう言います。「あなたは、彼らに対して適切な措置を取らなければならない」と。

アルニム：彼らは地下組織に属している者を扇動し、我々がそれを阻止すると彼らは皆わめく。ところで、彼らが我々を非難していることは、インドでも行われている。[125]

イギリスの国民性を引き合いに出して、強烈にイギリスを批判している将校もいた。

ボーズ：そしてドイツ国民は永久に終わった。—ばかばかしいが—4900 万だか何千万人だかいるイギリス人というクソみたいな国民が、尊大だがまったくのろまで教養のない気質

---

[125] Neitzel, *Abgehört*, S. 238-239. SRGG520、1943 年 11 月 3 日の記録。

で、ドイツ国民を支配したがっていると思うか？それは、我々が全くもって許してはならない思い上がりだ。我々の民族としての誇り Nationalstolz が、我々がそのようなクソどもに支配されたくないと言っている。

ビューレ：その通りです。

ボーズ：我々は奴らのことをよく知っている。我々は、この通りがどのように見えるかしっている(…)。いくつかの大都市はまだ我慢できるかもしれないが、それ以外はめちゃくちゃで、ひどい国民だ。それに対して我がドイツの諸都市、もしくはドイツの鉄道やドイツの交通施設、その他全てのものを見れば、洗練された国家だとわかる。全て傑出している。ゲッベルスは昨日「敵から学ぶことはあっても、敵を賛美することは無いのは自明である」と言った。私はもう長い間敵をたたえておらず、わが国民を称賛している。

ビューレ：この話を考えれば考えるほど、少佐殿が今しがた言ったように、彼ら〔イギリス〕には海軍があることが唯一〔賞賛できること〕だというのが事実だと分かります。[126]

ラムケやクリューヴェルのような明白に親ナチ的ではない将校も、過去のイギリスの行為を例に出して、非難していることもあった。ヴィルダームートは「私は先の戦争からそれを知っています。彼ら〔イギリス人〕は我々よりもずっと多くの人を、不服従と脱走の罪で銃殺しました」[127]と、第一次世界大戦の際にイギリス軍が自軍の反抗的な者を処刑していたことを挙げ、国防軍の犯罪行為だけがやり玉に挙げられることに疑念を呈している。ただし、ラムケやクリューヴェル、ボーズと比べると、明白に批判しているわけではない。

以上のように、戦争の関連する事柄以外を引き合いに出してイギリスを非難する者は、ヴィ

---

[126] Neitzel, *Abgehört,* S. 108-109. SRGG615、1943 年 12 月 4 日の記録。なおビューラーは将校ではなく、伍長（Unteroffizier）であるため、第 2 章第 2 節において人物紹介はしていない。

[127] Neitzel, *Abgehört,* S. 303. GRGG277、1945 年 3 月 28-29 日の記録。ただし、この発言に対して、会話相手であるハイムが「例えば、ボーア戦争では、多くのイギリス人将校が、命令を受けて、「ああ。それはよくない」と言ったとは思わないか？」と、歴史事象を引き合いに出して反論している。

ルダームートのような例外はいるものの、親ナチ的傾向が強い将校に偏っていた。また、クリューヴェルとボーズに関しては、1943 年 5 月前後に北アフリカで捕虜になっている点も重要である。第 3 節で述べるように、1944 年 6 月のノルマンディー以降に捕虜になった将校は、このような事柄よりも、戦争に関連する事象を引き合いに出してイギリスを非難することが多かった。

第 3 節：ノルマンディー以後に現れる対イギリス認識

第 2 節ではノルマンディー以前に対イギリス認識を見てきたが、第 3 節ではノルマンディー以後に頻繁に現れるようになる、言い換えると時期によって変化している対イギリス認識について扱う。その内容としては、反共産主義からくる反イギリス感情、空爆による反イギリス感情というものである。前者は、第 1 節で説明した対ロシア像とも密接に絡んでいる。第 2 節の最後でも触れたが、反共産主義ないし空爆に言及している将校は、ほとんどがノルマンディー上陸作戦以降に捕虜になっている。

反共産主義からくる反イギリス感情を説明する上で重要なものとして、「ザイトリッツ・クラブ Seydlitz-Klub」と捕虜たちに呼ばれた組織がある。自由ドイツ全国委員会[128]という、ドイツ共産党の亡命幹部がソ連で結成した最大の抵抗組織と類似した組織に、東部戦線で捕虜になったヴァルター・フォン・ザイトリッツ＝クルツバッハ砲兵大将（General von der Artillerie Walter con Seydlitz-Kurzbach）が、ドイツ将校同盟を組織して自由ドイツ国民委員会に合流した[129]。そして、捕虜たちはこのグループをまとめて「ザイトリッツ・クラブ」と名付け、ザイトリッツの活動に同調してイギリスと協力して似たような組織を形成するか議論したという流れである。そしてその議論の際に持ち出されるのが、共産主義やロシアに対する反感といったもの

---

[128] モスクワ以外にロンドン、パリ、ドイツ各地にも活動拠点を持っていた。竹中暉雄『エーデールヴァイス海賊団』勁草書房、1998 年、232 頁を参照。

[129] ヒトラー暗殺未遂の後、ザイトリッツの家族も罪に問う基本方針が決められた。對馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々』中公新書、2015 年、119 頁および 146 頁を参照。

だ。ブロイヒの「唯一の可能性は、我々が講和を結び、ロシアに対してイギリスとともにルントシュテットを東部へ進軍させることだ。これが唯一の可能性だ。もしそうならなかったり、その後に混乱が起きたりすれば、純粋な共産主義になる」[130]や、エーベルバッハの「我々がアメリカやイギリスに占領される方がロシアに占領されるよりもずっと良いからだ」[131]という発言が示すように、ほとんどの捕虜は、ロシアによる占領とイギリスによる占領では後者を望み、イギリスとの協働はロシアに対抗するために行われるという認識を共有していた。

では将校らは皆イギリスと協力し、ザイトリッツの運動に加わることを望んだかといえば、そう単純ではない。「ロシア人と一緒にイギリスと戦いたいという願望を抱くことがある。なぜならイギリスはヨーロッパを共産主義に引き渡したからだ」[132]という発言に見られるように、捕虜たちはイギリスと共産主義を結び付けて、イギリスとの協力を拒むこともあった。さらに、ザイトリッツの活動がソ連で行われていることも、共産主義との関連性を見出す理由になっていた。次のバッセンジとエルフェルトの会話がその例である。

> 〔…〕バッセンジ：ではこう仮定しましょう。今日、ドイツで国家クーデターが起き、何人かの将軍が反乱を起こし、あなたはここに捕虜として座っています。そしてある日イギリス人が「ちょっと聞いてくれ。運動に加わってくれ。よく休んだ人が必要なんだ。協力してくれ」と言います。そしてクーデターは成功し、ヒトラーはまだ10000人を連れてオーバーザルツベルクにしがみついており、そこに戦力を投入したくないから、彼らは排除された。そのため、権力者はまだ生きていて、世界に向けて「お前らは皆裏切り者だ！」と放送している。ドイツではだれも気にしておらず、ナチスは退場し、国民は我々に何ら

---

[130] Neitzel, *Abgehört*, S. 112. GRGG149、1944年6月22-27日の記録。ルントシュテットとは、陸軍の古株で1942年に西方総軍司令官に任命されたゲルト・フォン・ルントシュテットのことを指す。大木毅『ドイツ軍事史　その虚像と実像』作品社、2016年、319頁を参照。

[131] Neitzel, *Abgehört*, S. 137. GRGG197、1944年9月20-21日の記録。

[132] Neitzel, *Abgehört*, S. 140. GRGG197、1944年9月20-21日の記録。ハインツ・オイゲン・エーベルバッハ（エーベルバッハ砲兵大将の息子）の発言。

かの任務を必要としています。我々は同じ問題に直面しています。

エルフェルト：実権が新政府にあるのであれば、新政府に向かわなければいけないのは間違いない。

バッセンジ：ええ。ではロシアが国家クーデターを起こした場合も考えてみましょう。国家クーデターが成功し、ザイトリッツ、ヴァイネルト（Weinert）、テールマン（Thählmann）[133]、そしてそのような仲間がテンペルホーフに着陸し、大勢の労働者（die Arbeitermassen）が彼らになだれ込みます。

〔…〕

エルフェルト：ザイトリッツとその仲間は、ことを為すために、もともとはこのような意図は持っていなかったのは確かだ。

バッセンジ：もちろんです。それは絶対的に左翼的な話 Linksgeschichte です。ザイトリッツが正しいのかどうか、今日では私にはよく分かりません。

エルフェルト：いや。私にもわからない。感情的には、私はロシア人と一緒にイギリス人に対峙するよりも、イギリスと一緒にロシアに対抗する方が良い。なぜなら、両者のうち一人が生き残ったドイツ人にある日降りかかるからだ。

バッセンジ：ええ。間違いなく。それが私たちの運命です。私がやらないであろうことの一つは、個人的にザイトリッツに関して気に入らないことです。それは、彼がラジオに登場したり、ビラをまいたり、拡声器を使ったり、包囲された指揮官に手紙を書いたり—

エルフェルト：一言でいえば—陰謀だ。[134]

彼らの会話からは、ロシアで活動している「ザイトリッツ・クラブ」が共産主義的なものであ

---

[133] ヴァイネルト、テールマン共にドイツ共産党員である。

[134] Neitzel, *Abgehört*, S. 392-398.SRGG1076、1944 年 12 月 10 日の記録。

り、ザイトリッツ主導でナチ体制を転覆させると、ドイツが共産主義化するのではないかという恐れが読み取れる。

共産主義以上に反イギリス感情を呼び起こしたものが、ドイツに対する空爆だ。まず捕虜たちは空爆を脅威とみなし、連合国による圧倒的な量の爆撃機に圧倒されることもあった。ヘネッケの「このままではダメだ。想像してくれ。3 日間に 3000 もの爆撃機がミュンヘンなどの上空を通過する。何が破壊され、どのように混乱が拡大するのか」[135]といった発言や、次のエーベルバッハ親子の会話がその例である。

父：すべてが遅すぎる。開発段階で全てめちゃくちゃになった。毎日 3000 もの爆撃機がドイツへ向かっている。多すぎだ。

息子：3000 機は多すぎると思う。

父:新しい戦争手段が戦争を決定づけたことは決してないということを忘れてはならない。

息子:一つ忘れてはならないことがある。それは、今日航空機に対する戦争手段があれば、戦争は決まってしまうということだ。[136]

また、ロートキルヒの「我々には空爆を受けた多くの都市がある。今や都市から大量の人びとがやってきて、村には避難民がいる。もちろん区別は必要だ。誰がパルチザンなのか。避難民は非常にその図をぼやかしている」[137]などからも、ドイツに対する空爆が捕虜の話題の一つとなっていたことがわかる。そしてイギリスによる空爆が激しくなるノルマンディー以降は、捕虜たちの会話に空爆と反イギリス感情を絡めた発言が増えた。

フランツの「イギリス人もアメリカ人も偽善的な社会だ。今、奴らは誇張した言葉でそんな話をでっち上げている。まずドイツ人を爆弾などで殺し、その後すぐに死なせた。まさに彼ら

---

[135] Neitzel, *Abgehört*, S. 116. GRGG159、1944 年 7 月 15-16 日の記録。

[136] Neitzel, *Abgehört*, S. 138. GRGG197、1944 年 9 月 20-21 日の記録。

[137] Neitzel, *Abgehört*, S. 191. GRGG270、1945 年 5 月 9 日の記録。

の望み通り、2000万人のドイツ人を絶滅させたのだ。彼らはこれを壮大な決まり文句をもって行う。強制収容所の話や党の指導者の話などを持ち出す。彼らはこれを引き合いに出し、こう言うのだ。「これが我々の権利だ！」と」[138]という発言は、その典型だ。彼は連合国の空爆と強制収容所を対比させ、イギリスやアメリカを偽善的と批判している[139]。CSDICから明確な反ナチと見なされ、肯定的な評価を下されていた彼が強烈な反イギリス的発言をしていることは重要である。

フランツよりは明白に主張してはいないが、「今爆弾が降り注ぐと、普通の労働者（einfache Arbeiter）や普通の参事官（einfache Regierungsrat）、少佐（Major）等、そしてドイツ人女性は、ヒトラーとゲッベルスが何度も言っていたこと、すなわち、あなた方〔イギリス〕がものすごい粗暴さをもってドイツ的なもの全てを滅ぼすだろうということを証明していると信じます。ドイツ的なものとは、子供だろうが女性だろうが関係ない」[140]というブルーンの発言も同様だ。この記録はブルーンとイギリス軍将校との会話をまとめているものだが、その中でブルーンは、空爆によってドイツ国民がナチ体制によって喧伝されているイギリス像を受容するという旨を伝え、空爆をやめるように暗に促している。

ノルマンディー以前の発言の中では、以下のボーズの発言が、空爆について言及している唯一の記録となっている。

> ボーズ：〔…〕私にとって、ここで活動している我々の穏健さは、多くの点で、イギリスの収容所司令官やイギリス人高級将校に対する憎しみのような、私の気質やイギリス人に対する憎しみと相いれないことは全く持って明白であり、私自身もそう感じることもある。そしてもちろん若者たち、とくにここにいる貴官にとっては穏健すぎると思われる―ので

---

[138] Neitzel, *Abgehört*, S. 213. GRGG301、1945年5月16-17日の記録。

[139] ただしこれと対照的な会話も存在する。その会話ではドイツに対する空襲と、ユダヤ人殺害を比較し、空襲が戦争行為の範疇であるのに対してユダヤ人殺害は全く別のものだと認めている。Neitzel, *Abgehört*, S. 313. GRGG314、1945年6月7-30日の記録を参照。

[140] Neitzel, *Abgehört*, S. 187. GRGG267、1945年5月2-3日の記録。

穏健な表現を使うことができない。そして貴官が、その情熱、ナチズムによって強められた祖国への愛によって、イギリスに対する狂信的な憎しみが、残虐なニュース－今や我々の家族に襲い掛かっている空爆－によって支えられ、より情け容赦なく、妥協なく、より厳しく行動するだろうということだ。[141]

第2節でも説明したように、ボーズは親ナチ的人物ということもあり、かなり極端な反イギリス的発言をしているが、その中では家族に対する空爆によってイギリスへの憎しみが増加すると認めている。

以上、第3章について小括すると、まず対ロシア認識においては、ナチ・イデオロギー以前から存在する共産主義に対する反感は政治的な傾向を問わずあらゆる捕虜に見られる。ロシアを「未開」や「野蛮」とするイメージも様々な捕虜に見られるがそのイメージが反ロシア的認識につながるかどうかは捕虜によって異なった。そしてこの2つよりも頻繁に登場したのが占領や報復への恐怖であった。次に、時期に関係なく現れる対イギリス認識においては、歴史事象や国民性を引き合いに出した反イギリス認識は、両方ともナチ寄りの人物に特有の認識であった。最後に、反共産主義や空爆によって引き起こされた反イギリス認識は親ナチ的・反ナチ的に関係なく登場するが、その強弱は政治的傾向によって異なる。

---

[141] Neitzel, *Abgehört*, S. 110. SRGG748、1944年1月7日の記録。

おわりに

本稿では、第二次世界大戦期におけるドイツ国防軍将校の敵国認識を、捕虜盗聴記録という史料を分析することによって明らかにした。最後に、各章の内容を整理したうえで、考察と今後の展望を描く。

まず第 1 章では、ドイツ国防軍の戦況、将校団の構成、先行研究で述べられている将校の世界観について明らかにした。戦況においては、第二次世界大戦の進展の中で、連合国によるドイツに対する空爆は 1943 年以降に徐々に強まっていき、ノルマンディー上陸作戦が実施された 1944 年 6 月以降本格化した。第 2 節においては、再軍備以後に将校団が急激に拡大したことや、第一次世界大戦においてどのような戦争体験をしたかによって将校団を世代ごとに区分できることを説明した。第 3 節においては、先行研究では国防軍将校の世界観、特に敵国認識がどのようなものだとされていたのかを概観した。

続いて第 2 章では、連合国が枢軸国兵士に対して行っていた諜報活動、トレント・パークにおける盗聴活動と盗聴記録、そして本稿で扱う将校の略歴を説明した。第 1 節では、諜報活動が世界規模で行われ、特に捕虜から情報を可能な限り搾り取ろうとする連合国側の姿を提示した。第 2 節では、国防軍軍人のうち、トレント・パークには主に将校が収容されたことを指摘したうえで、作成された盗聴記録の種類と性質について取り扱った。第 3 節では、第 3 章に登場する捕虜がどういった人物かを、CSDIC による評価も用いて作成した。

最後に第 3 章では、捕虜となった国防軍将校が抱いていた対ロシア認識、対イギリス認識を、盗聴記録を分析し明らかにした。対ロシア認識においては、共産主義に対する反感は、政治的傾向に関係なくあらゆる捕虜に見られるが、特にラムケのような親ナチ的人物は「ユダヤ・ボリシェヴィズム」というナチ党が喧伝している用語を用いて、「アジア」的ロシアの脅威を表明していた。ロシアを「未開」や「野蛮」と見なしていても、ロシアに対する認識が必ずしも否定的とは限らないことをハイムの例が示している。ロシアによる報復への恐怖や不安は、ロシアに関する発言の中で最も頻繁に登場するものであり、あらゆる捕虜が恐れていたことがうかがえる。対イギリス認識においては、歴史事象や国民性などといった第二次世界大戦における

戦争体験以外の事柄を引き合いに出してイギリスを非難する者は、第一次世界大戦のことに関連してイギリスを批判したハイムのような例はあるものの、ほとんどが親ナチ的で極端な人物だった。そしてソ連における「ザイトリッツ・クラブ」やドイツに対する空爆といった、第二次世界大戦の戦況に直接関連する事象を引き合いに出してイギリスを批判する者はノルマンディー以後に捕虜になった者が多い。空爆について早くから批判している者は、ボーズのような親ナチ的であった。反共産主義を引き合いに出してイギリスを批判する場合と、空爆に関連してイギリスを批判する場合では、空爆の方が反イギリス的感情を強めた。この理由としては、ザイトリッツの運動に同調するためにイギリスと協働することに対して、共産主義を理由にして不満を表明した将校は確かに多かったが、ソ連に占領されるよりはイギリスに協力した方がましだと考える傾向にあったためだと考えられる。

重要なのは、第 1 章第 3 節で扱った先行研究における国防軍将校のイギリス認識と、本稿の結論が決定的に異なっていることだ。ザイトル、グロースともに捕虜の対イギリス認識は全体として肯定的なものだったとしているが、『盗聴されていた』を分析した限りでは肯定的認識はほとんど見られず、むしろあらゆる捕虜がイギリスを否定的にとらえていた。特にザイトルと分析結果がずれた理由に、ザイトルが北アフリカで捕虜になった者のみを分析しているのに対して、本稿で取り扱った将校の大半がノルマンディー以降に捕虜になっていることが考えられる。空爆が激化するノルマンディー以降に捕虜になった者は、祖国を破壊しているイギリスに対して少なからず否定的感情を抱いていたといえる。そしてこのことは、グロースの、戦争体験が捕虜たちの敵国認識を肯定的なものにしたという主張に疑念を投げかける。また、イギリスと協力してドイツを降伏させるという案は、結局実現することはなかった。ソ連での活動が実現しているのに対して、イギリスにおける計画が空中分解に終わったのはなぜか。その理由として、ナイツェルは捕虜たちの戦争体験の違いと軍事的な価値観という 2 点を挙げている。戦争体験に関しては、独ソ戦の過酷さは捕虜たちに軍指導部に見捨てられたという考えを生じさせ、ソ連との協力に対する考えを変化させたが、イギリスの捕虜たちはそれほど破滅的な戦局を体験しなかったため、ナチ政府に対抗する決意は弱かったと、ナイツェルは主張している。そして軍事的な価値観においては、自分たちは軍人であるという自己認識が、まだ戦場で戦っ

ている戦友たちに降伏を促し、自らが忠誠を誓った国や総統に反抗してもよいのかという葛藤が原因だとされている[142]。だがそれに加えて、祖国ドイツへの空爆も、イギリスと協力する意思を挫くものだったのではないかと考察する。

ただし、本稿で取り扱った史料『盗聴されていた』は、あくまでイギリス側の盗聴記録全体の中からナイツェルが選んで収録したものにすぎない。盗聴記録全体を分析すると、ザイトルやグロースの言っている肯定的な敵国像の方が正しい可能性もある。また、史料の関係上、国防軍のうち、将校という階級が高い者の発言しか分析できておらず、普通の兵士の盗聴記録を分析すると、今回の結論とは異なる分析結果が現れる可能性も十分にあるし、アメリカ側の盗聴記録では全く認識が違うかもしれない。このことは今後の課題である。

---

[142] Neitzel, *Abgehört*, S. 78-83.

図表 1　第二次世界大戦年表

1939 年 9 月 1 日	ドイツがポーランドに侵攻。第二次世界大戦勃発。
1939 年 9 月 27 日	ワルシャワ陥落。
1940 年 4 月 9 日	ドイツ軍、デンマーク占領。ノルウェーに上陸。
1940 年 5 月 10 日	ドイツ軍、ベネルクス三国侵入。
1940 年 6 月 14 日	ドイツ軍パリ入城。
1940 年 8 月 8 日	ドイツ空軍イギリス空爆開始。
1941 年 4 月 6 日	ドイツ軍、バルカン半島侵攻。
1941 年 2 月 12 日	ドイツ軍、北アフリカに派兵。
1941 年 6 月 22 日	ドイツ軍、ソ連侵攻を開始。独ソ戦開戦。
1941 年 12 月 5 日	ドイツ軍、モスクワ門前で進撃停止。ソ連軍の大反攻。
1942 年 3 月 28 日	イギリス空軍によるドイツ爆撃作戦開始。リューベック空爆。
1942 年 4 月 5 日	ドイツ軍、コーカサス方面へ進軍開始。
1942 年 5 月 30 日	ケルン空爆。
1942 年 7 月 1 日	ドイツアフリカ軍団、進撃停止。
1942 年 11 月 8 日	連合軍、北西アフリカ上陸。
1942 年 11 月 11 日	ソ連軍、スターリングラードで反撃開始。
1943 年 1 月 31 日	ドイツ軍、スターリングラードで大敗。第 6 軍が捕虜に。
1943 年 5 月 12 日	チュニジアにて枢軸軍降伏。
1943 年 7 月 10 日	連合軍、シチリア島侵攻開始。
1943 年 7 月 24 日	ハンブルク大空襲。
1943 年 9 月 8 日	イタリア降伏。
1943 年 11 月 18 日	ベルリン大空襲開始。
1944 年 6 月 6 日	連合軍、ノルマンディー上陸作戦開始。
1944 年 6 月 21 日	アメリカ軍機の英ソ連間往復爆撃開始。
1944 年 6 月 22 日	ソ連軍の大攻勢。
1944 年 7 月 20 日	ヒトラー暗殺未遂事件。
1944 年 8 月 25 日	パリ解放。

1944 年 9 月中旬	ドイツ本土爆撃強化。
1944 年 12 月 16 日	西部戦線にてドイツ軍の反攻。
1945 年 2 月 13 日	連合軍、ドレスデン爆撃。
1945 年 4 月 22 日	ソ連軍、ベルリン入城。
1945 年 4 月 30 日	ヒトラー自決。
1945 年 5 月 7 日	ドイツ、連合国に無条件降伏。

（B・H・リデル・ハート（上村達雄訳）『第二次世界大戦』下巻、中央公論新社、1999 年、484-499 頁をもとに作成。）

図表２　ドイツにおける空襲による死者数

表 3-1　空爆によるドイツ主要都市の死者数

ハンブルク	42,000
ドレスデン	35,000-45,000
ベルリン	49,000
ケルン	20,000
フォルツハイム	20,000
マグデブルク	15,000
カッセル	13,000
ダルムシュタット	12,300
ハイルブロン	7,500
ミュンヘン	6,300

出典：荒井真一『空爆の歴史』岩波新書、2008 年、73 頁。

図表３　1933 年～1945 年における将官の階級分布と累計

階級	陸軍	海軍	空軍	合計
元帥	19	2	5	26
上級大将	38	11	12	61
大将	334	39	100	473
中将	795	84	168	1047
少将	1158	155	270	1583
合計	2325	291	555	3190

（Reinhard Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite. Rang- und Herkunftsstruktur der deutschen Generale und Admirale 1933-1945*, Oldenbourg, 1996, p46 をもとに作成。）

図表 4　分析対象の略歴

名前と階級	生年月日	捕虜になった日	トレント・パークに収容されていた期間	CSDICの評価
クリューヴェル大将	1892年	1942年5月29日	1942年8月22日～1944年6月16日	親ナチ派
ボーズ中佐	1911年	1943年5月9日	1943年6月半ば～1944年1月30日	親ナチ派
バッセンジ少将	1897年	1943年5月9日	1943年5月16日～	反ナチ派
アルニム上級大将	1889年	1943 年5月12日	1943年5月16日～1944年6月16日	中立
ヘネッケ海軍少将	1898年	1944年6月26日	1944年7月3日～1944年9月12日	記述なし
エルフェルト中将	1895年	1944年8月20日	1944年8月23日～	反ナチ派
コルティッツ歩兵大将	1894年	1944年8月25日	1944年8月29日～1945年4月10日	反ナチ派
エーベルバッハ装甲兵大将	1895年	1944年8月31日	1944年9月6日～	反ナチ派
フェルベルト少将	1894年	1944年9月10日	1944年12月28日～1945年8月8日	反ナチ派
ヴィルダームート大佐	1890年	1944年9月12日	1944年11月5日～	反ナチ派
ラムケ降下猟兵大将	1889年	1944年9月19日	1944年9月27日～1945年4月10日	親ナチ派
ハイム中将	1895年	1944年9月23日	1944年9月28日～	記述なし
ブルーン少将	1898年	1944年11月22日	1944年12月28日～1945年5月	反ナチ派
フランツ少将	1902年	1945年4月8日	1945年5月5日～7月5日	反ナチ派
シリー中将	1891年	1945年4月10日	ラーティマーハウスに収容	記述なし

（Sönke Neitzel, *Abgehört. Deutsche Generäle in britischer Kriegsgefangenschaft 1942-1945*, Berlin, 2007 をもとに作成）

参考文献

史料

- Sönke Neitzel, *Abgehört. Deutsche Generäle in britischer Kriegsgefangenschaft 1942-1945*, Berlin, 2007.

二次文献

外国語文献

- Michaela Christ, »Das wird sich alles einmal rächeln.« Gewalt und Verbrechen in den Gesprächen deutscher Kriegsgefangener im amerikanischen Verhörlager Fort Hunt, in: Harald Weltzer, Sönke Neitzel, Christian Gudehus(hrsg.), *Der Führer war wieder viel zu human, viel zu gefühlvoll*, Frankfurt am Main, 2011, S. 266-298.
- Kent Fedorowich, Bob Moore, Prisoners of War in the Second World War: An Overview, In: Bob Moore eds, *Prisoners of War and their Captors in World War II*, 1996,
- Kent Fedrowich, Axis Prisnors War as Sources for British Military Intelligence 1939-42, *Intelligence and National Security*, Vol. 14, No. 2, pp. 156-178.
- Hellen Fry, *The walls have ears*, London, 2020.
- Stephanie Fuchs, *»Ich bin kein Nazi, aber Deutscher«*, unv. Masterarbeit, Universität Bern, 2010.
- Sebastian Groß, *Gefangen im Krieg. Frontsoldaten der Wehrmacht und ihre Weltsicht*, Berlin, 2012.
- Alexander Hoerkens, *Unter Nazis? Die NS-Ideologie in den abgehörten Gesprächen deutscher Kriegsgefangener in England 1939-1945*, Berlin, 2014.
- Johannes Hürter, *Ein deutscher General an der Ostfront. Die Briefe und Tagebücher des Gotthard Heinrici 1941/42*, Erfurt, 2001.

- Johannes Hürter, *Hitlers Heerführer. Die deutschen Oberbefehlshaber im Krieg gegen die Sowjetunion 1941/42*, Oldenburg, 2007.
- Macgregor Knox, 1 October 1942. Adolf Hitler, Wehrmacht officer policy, and social revolution, *The historical Journal*, Cambridge University Press, 2000, p. 801-805.
- MacGregor Knox: Rezension von: Sönke Neitzel/ Harald Welzer: Soldaten. Protokolle vom Kämpfen, Töten und Sterben, Frankfurt am Main, 2011, in: *sehepunkte* 12, 2012, Nr. 3.
- MacGregor Knox: Rezension von: Felix Römer, Kameraden. Die Wehrmacht von innen, München/ Zürich, 2012, in: sehepunkte 14, 2014, Nr. 1.
- Bernhard R Kroener, »Strukturelle Veränderungen in der militärischen Gesellschaft des Dritten Reiches«, in: Michael Prinz, Rainer Zitelmann(Hg.), *Nationalsozialismus und Modernisierung*, Darmstadt, 1991, S. 271-274.
- Walther Lammers, *Zur Mentalität deutscher Generäle bei Beginn des Krieges gegen die Sowjetunion(Juni bis Dezember 1941)*, Sitzungsberichte der Wissenschaftlichen Gesellschaft an der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main, Stuttgart 1990.
- Bob Moore, Axis prisoners in Britain during the Second World War, In: Bob Moore eds, *Prisoners of War and their Captors in World War II*, 1996, pp. 19-46.
- Felix Römer, *Kameraden. Die Wehrmacht von innen*, München/ Zürich, 2012.
- Tobias Seidl, *Führerpersönlichkeiten. Deutungen und Interpretationen deutscher Wehrmachtgeneräle in britischer Kriegsgefangenschaft,* Paderborn, 2012.
- Byron Schirbock: Rezension von: Sebastian Groß, Gefangen im Krieg. Frontsoldaten der Wehrmacht und ihre Weltsicht, Berlin, 2012, in: perspectivia.net, 19./20. Jahrhundert – Histoire contemporaine, 2015.
- Reinhard Stumpf, *Die Wehrmacht-Elite. Rang- und Herkunftsstruktur der deutschen Generale und Admirale 1933-1945*, Oldenbourg, 1996.
- Wolfram Wette, *Die Wehrmacht. Feindbilder, Vernichtungskrieg, Legenden*, Frankfurt am Main, 2002.

日本語文献

- 荒井信一『空爆の歴史—終わらない大量虐殺—』岩波新書、2008 年。
- H・P・ウィルモット（等松春夫監訳）『大いなる聖戦』下巻、国書刊行会、2018 年。
- 大木毅『ドイツ軍事史』
- 大木毅『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍』岩波書店、2019 年
- 大木毅『戦車将軍グデーリアン—「電撃戦」を演出した男』角川新書、2020 年。
- 小野寺拓也「危機的状況に現れる「真の顔」—第二次大戦末期のドイツ社会・国防軍 をめぐる近年の研究から」『ヨーロッパ研究』第 8 巻、2009 年、173-184 頁。
- 小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」—第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社、2012 年。
- 芝健介『ホロコースト』中公新書、2008 年。
- 竹中暉雄『エーデールヴァイス海賊団』勁草書房、1998 年。
- 對馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々』中公新書、2015 年。
- ゼンケ・ナイツェル、ハラルト・ヴェルツァー『兵士というもの』2018 年。
- 永岑三千輝「ホロコーストの論理と力学—総力戦敗退過程の弁証法」『横浜市立大学 論叢社会科学系列』第 55 号、2003 年、265-296 頁。
- B・H・リデル・ハート（上村達雄訳）『第二次世界大戦』下巻、中央公論新社、1999 年。
- 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年。
- 秦郁彦「太平洋戦場の日本人捕虜(1)」『拓殖大学論集』1 巻 2 号、1993 年、296-236 頁。
- ケント・フェドロヴィッチ(渡辺知訳)「敵を知る—オーストラリアにおける軍事諜報活動・政治戦・日本人捕虜、1942-45 年」木畑洋一他編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、2003 年、109-141 頁。
- 藤田久一「国際法から見た捕虜の地位」木畑洋一他編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、2003 年、15-34 頁。

- リチャード・ベッセル(大山昌訳)『ナチスの戦争 1918―1949』中公新書、2015 年。
- キース・ロウ(猪狩弘美・望龍彦訳)『蛮行のヨーロッパ』白水社、2019 年。
- ゲアハード・L・ワインバーグ（矢吹啓訳)『第二次世界大戦』創元社、2018 年。
- 若林美佐知「ナチ体制の政策決定要因をめぐる一考察―ドイツ占領下セルビアにおける抵抗運動対策をてがかりに―」『現代史研究』第 51 号、2005 年、1-14 頁。